明治二十九年

女學雜誌

五月刊行

第四百貳拾貳號目次

私立明治女學校新築費募集の告白

明治女學校は今を距ること十又二年(時正に明治十八年八月) 世間未た吾國人の私立に成れる女學校あらざりし時木村熊二、島田三郎、田口卯吉の諸氏其他及び不肖善治が發起創立したる者也。之より先き女學校の官立に成るもの若くは外國宣教師諸君の設置に係る者はありしが、民間士人獨立の力を擧けて新文明と吾國風とに適應したる女學校を開設せしものはあらざりし也。此に於て諸氏慨然として此發起あり、爾來十又二年、初一の精神を貫き、官に倚らず外國會社の補助を要めず、單に同情同感ある吾同胞國民に訴へ困厄窮乏の間に漸やく發育して卒業生を出すと一百四十名に超え、多年の精神次第に貫徹して今や全國到る所に校友あらざるはなし。就中三井銀行の諸氏は久しく懇志を垂れ昨年に及では、三井高保氏金三千圓を寄附せられ、其他某々の諸氏(其の名を公にすることを好み玉はず故に明記せず)尤も同情を垂れて內外の助勢彌よ加はり、此年に至て吾明治女學校は俄然一段の發達を遂け前途の春色大に動きて將に近く爛熳たる光景を呈せんとせしに、今茲一月五日、隣家火を發し不幸類燒の厄に會ひ、校舍別舍、教師館、忽然として烏有に歸し、藏書器械悉皆燒滅し、多年の經營一朝にして焦土となりぬ。然れども、吾等が女學に對して感慨する所は尋常にあらず、素もり一敗の故に挫折すへけんや。今や吾等が職責は寧ろ一層重大となれるを覺ゆ、則ち彌よ奮つて倍〻斯道の爲に鞠躬盡力せんとを期圖するの念や勃々たり。幸にして三井家再應の助力により同番地內の殘舍を假用して授業を續くることを得、災後十日既に讀者の聲を復し現に依然として平日の如くなるも、速に新校舍を再築し器械を整頓し四方の望に副んとを熱望すると太だ切なり。仰ぎ願くは吾國同胞の諸君、徐ろに吾等十有餘年の經營を吟味し、一片の赤誠只唯だ斯道に盡瘁せんとを望んで他意なきの情懷を察せられ、幸に義捐を寄せて校舍再築の擧を助けられんとを謹て切願す。

明治二十九年三月

東京麴町區下六番町六番地

私立明治女學校々長

巖本善治

女學雜誌

第四百貳拾貳號

明治二十九年
五月二十五日發兌

社説

我國風血統を重んずと言ひ難し

血統果して重んずべき乎。

尚武半開の時代にありては、『血』と云ふものを特の外に尊重するを例とす。生命は血にありと信ずるは素よりの事、名譽も、勇氣も、眞實も、貞節も、皆な血のうちにありと固く信じて毫も疑ふとなし。故に、血を形容しては、寶血と言ひ、之を尊重すると、あらゆる物に優れり。左れば、血統を重んずるの習慣は、特に斯樣なる時代の特色とする所ろのもの也。血統の斷續は即はち家寶の斷續の如く、血統の貧富は即はち家財の貧富の如し。故に、只管らに血統の絶えんとを懼れて、尚且つ其の擴張蔓延せんとを熱望す。一身一家の命脈榮辱は、只だ一縷の血統の上に掛りて存するものゝ如し。其の熱情は寧ろ感心すべき程なれども、之が爲めに種々の迷妄を生じ、啞然一笑せざるを得ざる奇談の行はるゝとも甚はだ多きと也。

斯の如く血統を尊重するの習慣は、全然迷信の發する所ろにして、毫も實際の理由なき事かと言ふに、素より然らざるとは疑ふ迄もなし。生物學の遺傳論が明證する所に隨へば、人の性質の遺傳は、血液細胞中の極微躰に依りて行はるゝものゝ如し。果して然らば、人生辛苦の結果、長壽營々たる所得の精分は、皆な眞とに血液の中に含蓄せられ存すと言ふも不可なき程なり。左らば、血統の遺傳に於て、此の精分を遺傳し、祖先傳來の家の寶と、兩親一生の財寶の要素とを、斯くして其の愛子に遺傳せんとを熱望するは當然の願求なり。故に、血統の斷絶は、家寶の斷絶の如く、折角の貯畜を傳ふるの道なくして、空しく泥土灰塵に委棄すると異なるとなし。此の意味に於て考ふれば、血統を尊重するは、實に正しき事にて、且つ理由ある學問的の事なりと言ふべし。

左れど、尙武未開の世の習はせとして、甚だしく血統を尊重するの事は、未だ必らずしも斯る學問的の覺りより思ひ付きたるとにはあらず。所詮、一種の迷信と、社會上組織の或る必要とによりて起され、其結果因循して、自づからに流行せし習慣なれば、之に正確なる解釋の附屬するにはあらず。隨ひて、迷信亦た迷信を重ね、遂に一種の理由なき大迷信として後代に遺傳するに至りたり。現時、我國に於て尙ほ依然として勢力ある『血統尊重論』の如きは、新らしき學術上の光輝によりて其の勢力を維持するにはあらず、單に舊時代の遺傳せる舊習慣の形骸たるに過ぎざる也。故に、何如に其の偏僻して不道理なるかを看破し、速かに迷信の餘臭を排ひ去らずんばある可らず。

そを何如んの事と言ふに、現時の血統論なるものは、單に、男子の血に付きて言ふあるのみ、毫も母方の血に付きて言ふとなし。是は昔し男子を偏重せし所以の謬りにも由るとなれど、武門尙武の時代、家督を續ぐものは男子に限り、男子なくんば即はち其家は斷絶することと定まりたるの制度に依て發起せしを最大原因とす。之よりして、『種』は男子にありと見做され、母の腹は『借り物』にて、『種』を播付けたる畠に異ならずと言ひ做し、血統の遺傳は、單に男子の精血にのみ存すと信じたり。此をもて、母の氏素性は如何なる者にても頓着せず、只だ父親の種を胎內に預かること十ヶ月、期滿ち芽發して呱々として赤兒を產めば即はち母の能事は了るものと心得たり。此の迷信は、彌よ迷信を固め、一と度びは笑ふ可き事例を現じ、遂には悲しむべき人事を引起して、今や決して默認す可らざる一大事を決するの據處となる迄に至りたり。吾人速やかに此の迷信を打破せざる可らず。

夫れ斯の如き迷信に發せる『血統尊重論』は、其の血統を尊重することの彌々切なるによりて、實は彌々其の血統を汚がすことあり。これ、男女二性が平分半一の理合ひによりて血統を遺傳するてふ生物學の元理を辨まへず、單に男性によつてのみ其の血すぢは傳へらるゝものと誤認するの迷信あるに由る也。

蓋し、男性の精素と女性の卵子と、相合して二個の細胞一つになり、此の一つ更に割れて分裂す。此の分合合離の間だに、遺傳の秘密は行なはるゝものなるが、もと二者相ひ混合して

新らしき一を生ずるものなれば、此の新らしき一に二個の親の性質を遺傳すると、平等に半々の割合なりと云ふは、現時の生物學が研究して、其の遺傳論に明證する所ろ也。左れば、一子に遺傳せられたる二親の血統は、父母双方の性質を合せ存し、毫も其の一方に偏するものにあらざるとは明白也。

然るに彼の舊來の血統尊重論によりては、單に遺傳を父方にのみありとして、母方にありと思惟せず。其の謬まりの結果する所ろ、男子にのみ撰擇を施こして、女邊に重きを置かず、毫も其の素性出處に頓着せざるが故に、血統は之によりて反つて薄らめられ、二三代にして殆んど祖先の傳素を失ひ去ると多し。

彼の妾を置くものを見よ。純然たる肉慾の奴隷たるものは、論外として、思想堅確、勤儉正直の男子、只管ら祖先を尊とび、家道を重んずるの精神よりして此の奇怪の所行を爲すものあり。所云ゆる『種取』と稱して、其本妻に子なき時に施こす所ろの習慣なり。左れど、此等の人士も、古來の男種血統論に誤まられ、血統は單に男子の種によつてのみ遺傳せらると謬信すればこそ則はち如此き所行はあるなれ。然るに、實際の結果は意外にして、氏素性卑くき全然他人の妾を置いて其子に、半ば異族の血統を傳へんよりは、自己が兄弟姉妹などの中に、由緒ある妻を得て正さしく子を擧げたる方の寧ろ、多く祖先の血統の維持するには及かざるとを覺らず。故に斯る所望によりて妾を置くものに限り、色の爲めに置妾せざる精神を顯はす人とて、わざ／＼醜婦を擇び、もしくは身分賤しきものなどを可として、只だ暫時其の腹を借用し、一子を擧さへすれば則はち暇を出し、以て窃かに其の賢なるとを自負するの態あり。左れど、遺傳は母方の半分を享くるの天理決して沒すべからざるが故に、此子は、存外なる下等の血統と、面白くもなき醜形とを傳へられ、折角に祖先以來磨き上げ、淸め澄ましたる家の血統の半量を汚すものとなる。遺憾何んぞ堪へん。此れ、實に血統を尊重するの精神よりして、反つて血統を輕蔑するものにあらずや。

嗚呼、此の誤謬によつて、我國の高等なる血統は幾度びか汚されたり。又、汚されつゝあり。血統を重んずるの國民、何んぞ之れに忍ぶべしとはする。同胞つねに揚言すらく、神洲の血統を見よと。左れど、一夫一婦の制を嚴かにし、置妾擧

子の弊を打破するにあらざれば、大日本高等人士の血統は、何の日にか夬れ清まんや。吾人は、茲に一種の血清療法を擧示す。血清療法は即はち庶子を以て正當なる遺傳の子と見做さゝること是也耳。

女學

貞潔の姿の變遷を論じて

女禮科の敎授法に及ぶ

道義の精髓は、万古動かず變はらざるものなれども、之を形式に寫して實地の德行となすに至つては、其品、其姿、時世國風に隨がひて變ず。これ、當然の譯なり。

左れば、婦人が廉恥の心は、其の天禀にして、何如なる時代、何如なる國柄に於ても、女に、恥かしみの心と、つゝしみの情との無きものは曾て有らずと雖ども、此心情を形はすの姿に至つては、常に異樣異色なきこと能はず。

或る印度人の女は、素裸にて外に出でありき、毫も恥かしと思はず、然し乍ら是非とも其躰に赤土白土の類を塗りて一種の化粧を爲すことを忘れず、もし之れなかりせば、一週にても二週にても曾て外に出でゆくことなしと言へり。

又、或る酋族の女は、臀の大いなるを誇りとし、細腰を殊の外に恥とし、種々の工夫をして臀の膨脹を計るものから、適種生存、優勝劣敗の理はりに漏れず、中には果して大膨脹を遂げ、獨り自から起つこと能はず、エンヤラやつと、細にたよりて起ち止るほどゝなりて則ち美人たる譽を博すと言へり。

以上二箇の實例は、格外の奇談なれども、彼等が文明人士の目に見て抱腹絕倒すべきところ、即はち其の名譽光榮とする所ろたることを示し、何如なる人種にも相應の廉恥はありて、女は取分け其の『つゝしみ』を肅しむの狀を證明すべし。素裸と大臀とをもて誇るなどは、愛嬌ある「恥しみ」と言ふことを得べき乎。左れば之とて其の眞實なる廉恥心たることを疑ふ可らざる也。

事由既に斯の如く、女のデリケシー(恥、つゝしみ、覺悟)は、其の國風と時代とによつて形を造成するものなれば、直ちに異境に行はるゝ風俗を擧げて之を是非すべきにあらす、又、輕卒に其の舊習を破りて併せて其精髓を損すべきにあらす。

要とする所は、其の精髓の進歩は先づ第一に希がひて、後に其形の追々に文明流に應化せんとを望みとすべし。

扨て、今の女學校なるものは、日本古流の女子敎育法に於て曾て無き所ろ也。隨がつて、古流の女禮に於て嚴に敎訓せられたる通りを此處に施こさんとしても、第一、建築の工合、間取の摸樣、腰のかけ方、人の出入の多數なるとなどよりして、到底、行はるゝとを得ざる事情あり。此の衝突よりして、知らず識らず古流の女のつゝしみを打破し、延いて其の愼しみの精神をも枯らすと甚はだ多し。

人の前にて髮を結び、帶を締めるなどは、古流の日本婦人に於て曾て無き所ろ也。其敎訓を受けたる令孃は皆な此の覺悟を所有せり。此の覺悟の實行に其の愼しみの精神を宿し、則はち此の習慣によつて女性の恥かしみを維持せし折柄、一朝女學校に入校して見れば、別段、化粧室の特に設置せらるゝともなし。然し乍ら束髮又は簡易なる形に結ひたる髮、又は帶などの偶然にも解けんとの無しとは言はず。左れば、一旦の必要よりして、止むとを得ず人前にて之を繕ひ、又、人の無邪氣に其の通りにするを見ると度々なれば、初めは異樣に感ぜしとも後には毫も怪しからず、不知不識、新風俗に慣染して、異日家庭の老婦人をして喫驚せしむる如き圖歯の所行を平氣にて爲すものとなるべし。

此は單だ一例を擧げたるのみなれども、此他の万事皆な以て類推するとを得べし。所云る女學生の自墮落なる評判も、此邊より起り、家庭の古流婦人が顰蹙も亦此邊より起る。一是、一非、必らずしも容易に斷案す可らずと雖ども、新舊衝突の塲合は到底、此の一變象を免かる可きに非ず。

左れば、之を責むるものに於ても、大いに勘辨する所なかる可らざると同時に、女學生たるものに於ても、亦大いに戒愼し、其の古流の愼しみを識らざる間に失ふとは云へ、其の覺悟の精神を放たざるは勿論、更に古流のに代るべき新らしき形のつゝしみ方を修め、成程、仕方は變りたれども、矢張り覺悟はあるものと納得せしめ、古流先輩をして無益の杞憂を抱かしめ奉らざるの心得肝要也。

然し乍ら此の責任は第一に女子敎育者其人にあるとを忘る可らず。女のたしなみと、つゝしみの禮儀とは、決して無益に急速に變化せしめべきものにあらず。而して、其の覺悟を形

はすべき技藝方式は、敎へざれば則はち知ることを得ず、決して眞心道念の發揮などにて自然に頓悟すべきものにもあらず、畢竟、一つの技たるものなれば、折にふれて古流婦人の覺悟せし摸樣を說き聞かせ、かゝる塲合、云々の禮儀には、斯樣々々にせしものぞと敎訓すること大切也。然らざれば、今の女學生は到底之を承知するの塲合なからん也。又、たとひ、今の女學生の身分に於ては、此の女流の禮儀の通りを實行することは稀なりとも、現に古流婦人の生存するものも多く、亦た之と交際することの無きにもあらずとすれば、矢張り、其人人の心得方の一斑は是非とも承知し置かざる可らず。况してや、此の古流婦人の覺悟なるものは、極めて殊勝にして、中中今時の女學生の容易すく想像し得べきものにあらず。即はち敎へられざれば多くは知らで過すべきものゆゑ、女子敎育者たるものが此を說き聞かすべき必要あり。

故に念ふ、女學校の女禮科なるものは、單に禮容儀式を敎ふるのみならず、機に臨み折に觸れての古來の日本婦人が高潔凛然たる覺悟と、つゝしみ方とを說き聞かせ、今の時處位に相應する禮の精神と其形とを敎ふる外に、併せて古流婦人の品姿決心などを示めすと甚はだ可なりと念ふ。

女學界の風潮

（一）女子のデリケシー

昔ジヤン、ダーク一度び甲を擐し、馬に跨り、陣頭に立ちて、三軍の將たれば、雲霞の强敵を敗り、堅固の城砦を奪ひ、祖國を赤手に支へて、當年十八才の處女は、正に佛國未聞の大勇將として、勇武絕倫、實に驚くに堪へたり。然るに又翻つて、英軍が無慈悲の縲紲に辱しめを受けて、牢獄に苦吟せし後日彼女を見れば、哀れ、一枚の男裝の奪ひ去るゝことあらんとするに怖れて、日夜戰々畏縮の思ひを抱けり。此時に於けるジヤン、ダークを曩日の彼女に比較すれば、前の勇武と、後の怯懦と、彼此兩端の差に示すが如く思はれ、殆ど訝むべくして、而もジヤンのジヤンなる所以亦實に茲に存す。この女らしき優情即ちデリケシーの、貔貅の猛將勇卒を頤使叱咤し、腥風血雨に櫛浴したる女將軍に於て、毫も消耗

せられず、終りまでもよく優美の存在をなしたることは、吾人が彼女に於て、何等の効績よりも勝りて、敬服に禁へざる所にして、此處にジヤン、ダークの眞に偉大なる所以を認むるなり。デリケシーなるものは、蓋し是れ女子が美質中の尤も愛好すべきものにして、若し之を一方より見んときは、荒荒しき所作をよくせず、夜中獨り歩きを克くせず、些かの物に怖るゝなんど、正に臆病の現はれをなすと雖も、此處即ち女性が日夜矍々然として、尤も愛重を加ふる、貞潔の美性を保護せんとするの本能より生ずるものにして、女子の「たしなみ」「心がけ」實に此デリケシーに源く。之を保護せんが爲めには、平素の可弱きも、敢て一死を辭せず。皓潔玲瓏なる玉身の、汚穢を受けんよりは、寧ろ自ら碎けんことを志しとするの覺悟ほど、清潔なる女子をして、奮勇せしむるものなきと、古今の女子に於て屢ば見聞する處に非ずや。

女子はよく其デリケシーを保護し、男子亦之を侵害せず。而して爰に男女間清德の第一歩あり。若し然らずして、男女相對するの時に於て、不潔なる言語も、下がゝりたる言語も、之に謹戒を加ふるの禮を守らざれば、假令ひ罪の行ひに遠ざかれりといふと雖ども、彼等が間より清念は辭去て、卑陋に陷る。清らかなる女子に接するの時、相互の親密なる、毫も距つる處なくして、なほ互の心に謹戒の念を引き緊め、清念滿ちて、邪思ある能はざる所以のものは、女子に於ては嚴に守持するデリケシーの美德なり、男子亦謹で之を保護するによる。彼西洋婦人が胸部以下の事を口にせず、男子より不淨處の處在を問はるゝを恥辱とするが如きは「つゝしみ」の上に於て甚だ美はしき習性にして、吾人は我國の女子にも、この心掛のあらんことを欲す。心掛、つゝしみのよき女子は、必ずこのデリケシーを守れるなり。彼烈女お藤が、毒婦を刺して、國害を除きつ、將に山路の雪と諸共に消え果てなんとして、不淨を拂ふの心掛ありしが如き、または會津籠城の女子が、いつ何時城を枕に打死の覺悟して、勇氣をさ〱男兒に劣らざりしが中にも、死期に見苦しき姿を殘さんことを恐れ、殊に日夜尤も憂懼せし所は、不淨場にあるの間に、非命の最後を遂げ、恥かしき姿を人に見することのあらんかといふことなりしが如き、その美はしきたしなみや、これ即ちかの美德の發現なり。このデリケシーを保護養成し、琢磨善導するは、

今日の女子教育を論じ、また之に任ずるもの、忽諸に附すべからざるの事たり。この美質を養成すること如何、其中素より語りて傳へ難く、書して功多からざるものあり。而も如斯き方法によらば、或は却て此に其美質を毀損するの虞あり。女子の天性はもと〳〵このデリクシーの美質を有す。されば教育者たるものが、其天性の美を保護すること微妙ならば、これぞ即ち養成の道を得たることにて、なほ又形式上の「つゝしみ」「心掛」等となるべき、様々の行儀風習は、務めて之を教へんこと、此デリクシーの養成に大なる効果を備ふべし。

而て女子のデリクシーは、其教育の進歩と共に増進し、豪毅事に處する位の心掛けある婦人には、必ずや一方には怯懦とも見ゆるばかりの可弱き性質の存在せるありて、而も決して矛盾せず、相倚りて互の發達をなせり。如此きこそ即ち女性の女性たる所以たるに、今日の女子教育を論ずるもの多くは此點を観過することなきか。先きつ頃教育時論記者が、「女子の體格と精神」とに就きて、意見を洩したるものを見るに、處論の方面のみに就きては、素より非議を立つべきに非らざれども、論點に多少の観過したる所あり、其中デリクシーの如き、も亦、或は論者の意見中に明かに起り來らざりしかとの疑ひなき能はず。時論記者論ずる所の要は、

女子の體格の强壯なるべきは、必然の要務なり、然れども之のみを圖りて、精神の修養を顧みざるが如きは、亦大に不可なり、而して吾等の所謂精神の修養とは、高尚、優美、活潑等の性能を云ふにあらず、豪毅事に處するの一事なり。」熟ら今日の女學生を見るに、其擧動、概ね活潑雄壯(?)にして時としては、男子をも凌ぐべき意氣を有する者あり。然れども其擧動の一見雄壯活潑なるにも拘らず、其眞底の精神、概ね臆病怯懦にして、毫も豪毅事に處するの風なきは、實に憫笑に堪へざるなり。

昔日の婦人は一旦緩急の時に際りては、斷然果決、繊手能く薙刀を提げて、敵陣に向ひ、又其舅夫に對し、申譯なき過失をなしたるときは、一死其罪を謝したりき。

といへるに在り。元來世は中々に偏頗不公平の行はるゝ處にして、權能者は己れの惡事をいはずして、下民の非をならし、親は己れの過ちを咎めずして子を責め、男は我事と云はずして、女の事に酷く容喙す。吾人は教育時論記者のいへるが如くに、平準以上の女學生が、平居無事の日には、其擧動如何にも雄壯活潑にして、肩を聳かし舌を皷らし、揚々自得するが如くなれども、一旦非常の場合に遭遇するときは、踏跙逡巡氣痿え神沮むもの、比々皆然かりと信ずる能はず。如此き

は平準以下に降すべき、不心得の女學生に於て或ひは時に見ることを得べけんも、大凡そ物の一般を見るには平準の以上を察すべくして、其以下を瞥見して忽ち是非の言をなすは、二三人の病者を見て、天下皆な病めりと論ずるが如し。然れども吾人は決して今日の女學生を以て、豪毅事に處するの精神に缺くる事なしとは信ぜず。この精神の修養たる素より、女子の敎育に於て頗る注意せざるべからざるの要點なりと雖も、女子この精神に乏しきを非難し、且つ之が修養に勉めざるべからざるを云ふに當り、敎育者たるもの先づ、時代の風潮と男子の狀態とを觀察せざるべからざるの責あり。抑も維新以降國風一變し、社會に武士的敎育の行はれざるに至りしより、今日の男子の、昔の男子の如くに沈毅事に處するの精神を缺ぐに至りたるは事實なり。男子すら此の精神に乏しきの今日、女子の之に缺げたること、豈に獨り擧げていふべきの事ならんや。敎育は時代の精神に伴はざらんと欲するも能はず、スパルタ國民の氣風にして、スパルタ的敎育あり、アゼンス國民の氣風にして、アゼンス的敎育あり。今日の時代は、昔日の時代に異なる。されば其敎育に差異あるは素より其所以なり。實に昔しの婦人の心掛のよかりし事、豪毅事に處するの精神の美くしかりしことなど、とても今日の女子の、及ぶべくも非ずして、慕はしきの限りなり。然れども昔の男子の如く心掛けよく、豪毅なりし事、また今日の男子に於て多く缺げたるの美質ならずや。豪毅事に處するの風や、これ實に、我國今日の男女に於て、尤も要する處にして、敎育上この精神の修養を要すること豈に何ぞ女子にのみ限るべけんや。

豪毅事に處するの精神の、女子の敎育に缺くべからざるを見ると共に之に反して、臆病怯懦なるを排せんといふが中に、看過すべからざるはデリケシーの養成なり。既に論じたるが如くに、デリケシーは女性をして或は臆病の見えをなさしむると雖も其の豪毅事に處するの精神もまた實に之によりて來る。女性の豪毅もしデリケシーの優情に伴はずんば、粗暴卑野に陷いり、さる女子は實に厭ふべし。女性が豪毅の精神は怯懦柔弱の裡に蘊蓄沈潜せるものたらざれば、其美を成す能はず。故に吾人は豪毅なる精神の修養を女子敎育に云ふと共にまた爰にデリケシーの養成を要すとはいふ。

(二) 意育、情育

ヘルベルト學說輸入せられてより、敎育界切りに意育の要を論ぜしが、此頃また聊か之に反するの說として、情育の說をきくに至りたる、其影響として、吾人は「太陽」記者によりて「女子の情育」なる舊說の繰返へさるゝを聞く。其論の要に曰く、

> 曾て女子教育に付きて、智育と德育との是非を爭へる時には、德育主張者は正しく凱歌を奏したりき。然れども同じく德育なり、意志堅固の婦人たらしむるを目的とすべきか、情緒温和の婦人たらしむべきか。女子としては無乃後者の教育を主とすべく、吾等は女子德育論の趨勢の、今一層進步して女子情育論に至らんことを欲す。蓋し女子教育の目的は、智の賢き婦人を得んよりも、意の强き婦人を得んよりも、情の温なる婦人を得んと欲するにあるべきは、火を視るよりも明なり。

と。一應の議論なり。これは敎育時論が豪毅事に處する精神の修養といへるに反對するの意見と見るべし。然るに女子敎育は智德圓滿を目的とすべし、豈に意育、情育の孰れかと論ふことをせんや。情緒温和なるが中には自から意志の堅固なるものなかるべからず、智よく德を備へ、柔よく剛を兼ぬる兩者並び行はれて、女子の敎育爰に其完きを見る。

(三) 鑄型的女子教育

敎育時論の說に曰く、

> 高等の女子教育論は今暫く之を措き、小學校に於ける女子教育の有樣を觀察して不滿足の點あるを感ぜずんばあらず。男女に對する教育と、女子に對する教育とは、既に小學校の時期よりして、之が區別を立てざるべからず。然れども一々之を區別せんとは到底之を實際に望むべからず。是に於てか巳むを得ず、男生と共に教育を受けながら、殊に女子に適切なる教育を受けしむべき方法手段を案出せざる可からず。若し今日の儘にして、輕々に之を看過せば、遂に男子ともつかず、女子ともつかざる一種異變の人間を造出するに至らん。

と。是れ小學校の女子敎育に就て、記者の論ずる處、これは男女混合敎育を非難する、常套の議論より割り出したるの說にして餘りに杞憂に過ぐ。當時敎育家の弊として、女子の異質に殊更目を呉れて、格別の鑄型にてもあるかの如くに思ふが故に、男女混合の敎育は、遂に男子ともつかず、女子ともつかずに、異變人間を造出するに至らんなどゝ、不思議の議論さへ出づるなり。小學校敎育時代の小兒に於ても、女兒には夫相應の注意を與ふべきも、此時よりして、女兒には女子てふ鑄型をこしらへて、成べく早く之に攻め込まんとするが如きに至りては、是れ遂に其性の伸張發達の害となり誰人か

のいひけん如くに小兒の肩に繼ぐに大人の頭を以てするの過失に陥るべし。アヽ、當今の女子に代りて訴へをなさんか、哀れ愍ひに世の敎育者等が、我等女性の異質を認むるが爲、そも男子の異質の敎育の事とてはいひだにもせで、親切か、不親切か、女性の異質々々と、囂々論ひて、それが爲めには、樣々の敎育説現はれ、妾等が敎育を受くるの道に、種々の障害となるものを。何れの世か我等女性をして、男子と共に自由放任の教育を受けしめらるべき。彼等男子にして、自由放任の敎育によりて、男子となり得べきものならば、我等女性とても、また同樣にして女子たり得ざるの理あらんや。我等は到底女子なり、如何にしても男子にも非らず、女子にも非らざる一種異變の人間とはなり得ざるものを。

(四) 女子の血液と高等敎育

寺田勇吉氏「女性と高等敎育との關係」の要に曰く、

女性の血液は其性質男性に及ばざるものあり隨て腦髓機能も亦男性に及ばざるものあるを以て女子は高等の學術を修むるに適せざるとの説は大に信憑するに足るものあるが如し然れども女子の高等敎育は歐米の碩學大家今猶は其意見を異にし或は之を是とするものあり或は之を非とするものあり又其實際に於ても米國の如く女子高等敎育の隆盛を極むるあり普國の如く女子の爲めに大學の門を公開せざるものあり今日に於ては理論實際共に未だ一定の歸着を見ざる問題なれば世の敎育家たるものは宜しく之が眞理の發見に盡力せざるべからず而して予は獨り高等敎育のみならず初等中等の敎育に至ても亦宜しく男女兩性の特質を研究して各適切の敎育を施すの必要あるを主張せんと欲するなり。

説くが如きはいつも女子高等敎育に反對するの説なれども、腦髓の大小、血液の厚薄など不確定の議論を根據として、女子高等敎育の可否を議論すべきに非ず。敎育上男子といへども、また女子に及ばざるもの多きに非ずや。要するに適種生存の原理を守りて女子の高等敎育を行ひ、之に適せざるものは失落するより外なきなり。しひて完からんとを欲して、却て多くを損するは今日敎育界の通弊に非ずや。

(五) 大隈伯の女子敎育説

大隈伯爵閑散の樂しみを廣くせんが爲めに、頃日佐賀に歸省し、鄕里子弟の爲めに敎育を談ず。談女子敎育に及ぶものあり、曰く、

殊に女子敎育は從來度外視せし觀なき能はざるも、國家は男女より成立せしものなる故に、女子敎育も男子敎育と並行せざる可からず。從來不振の有樣なりし女子敎育は同等以上の勵精を爲さゞる可からず。故に富强國と稱せらるゝ國

は女子教育尤も發達せり、語を換へて言へば、女子教育の盛なる故に富强なる基礎を鞏固にせしなり。是陳腐の説さいへごも、是を陳述する、未だ必ずしも裨益なくんばあらず。

と。吾人は此種の奬勵説が、此人の如き重んずべき地位の人の口より出づるとを悦ぶ、何となれば、其言に大なる重みと勢力とあればなり。之を聞ける肥山の子弟、必ずや今後女子教育を見ると更に重きを加へん乎。吾人はまた此種の説を以て女學界の益をなすと多しとし、自ら任じて教育家たるものの名説、高論に優れりとして喜ぶものなり。由來多くの教育家女子教育といへば、様々の理屈を研究して、様々の説議を案出し、其結果たる却て女學界大勢進歩の煩ひとなると多し。

(六) 女子の職業

近來報知新聞は頗る女子の職業問題に熱心にして、去月より引續きて今なほ之が調査研究に關して日々其報導を勉む。而してまた五月廿一日の同紙は『婦女の職業』に關して熱實有益の評論を試めり、其論ずる處要するに左の如し。

婦人の技術手腕懿徳良能は、之を經濟上社會上よりいへば寧ろ零位を價ひせるも、是れ決して無用なるものに非ず。其特性を利用して適當の職業を求めば、社會上、經濟上、文學上、美術上、男子さ拮抗し、若くは之を凌駕すべき恰當の事業は決して之無きを憂へず。又其特質の美德を各種の事業に適用せば、男子以上の成績を社會に收むべきの望みあり。

而て世の婦女教育の局に當るもの、亦此點に向つて其利導を勉めざるに非ざりしさ雖へごも其理想寧ろ高遠に失して、實際さ扞格し人をして婦女遂に濟度すべからざるの嘆を發せしめたるこさ少しさなさず。然れごも一の原因は一の結果を生ぜずんば休せず、婦女職業の理想は一般に社會に浸染せり其結果さして今日に顯現せる成績を見れば、意外の成果を呈したるもの多し。

といひ、而て婦人が其の職業に於て幾許の成功をなしたるかは、該新聞の既に掲載したる女醫、看護婦、電話交換手等の報告につきて見て知るべしといひつゝ、又いへり。

婦女は少くさも我國民全躰の半數を占斷する一大勢力なり、此大勢力にして容貌財產主義以外に驚くべきの成果を經濟上及び社會上の事實に現せば、日本の國力は少くさも曩時に比して倍加すべきなり。日東の婦女たるもの乞ふ益々自重し自强せよ、之を管理する教師、父兄、若くは主人たるもの、前途の光明を目標さして眼前の小紛冗を排し、益々勉めて婦女の勢力を大成するこさを期せよ。進化の大勢は婦女の目的を嘉納し、婦女管理の事業を翼賛し、彼岸に達せしむるや毫も疑なきなり。

と。吾人は既に該新聞が、綿密丁嚀なる女子職業の調査につきて、女學界の爲めに感謝するものなるに、今又以上の説を讀むに及んで、普通新聞界にこの良友を獲たるを喜ぶと甚

し。併し此種の議論は今後多くの普通新聞紙上に現はるゝと必ずや遠からじ。女學の大勢は、今や堤を破りて、洪水の如く漲り來りつゝあり、最早之を制止すべからざるの勢に達せるものを。

前號に於て報知新聞報導の『女子の職業』中、女醫、紡績工女に關する調査に就きて、要點を拔錄したる後、なほ續々掲出せられたる同報導の看護婦に關するものに就き、左に要項を摘み又之を補ひて左に錄す。

我國にて看護婦養成の始まりは明治二十年三宅秀博士の獨乙國より歸朝するや、看護婦養成の必要を唱へて、先づ之を慈惠病院に於て試みたるに始めあり。今日にては東京のみにても看護婦の數二百餘人あり、大阪、京都、名古屋、岡山、金澤、廣島等の各地に散在するものを合すれば四五千人あり。私立看護婦會の創設は鈴木マサ氏主任現在神田錦町の日本看護婦會なり。其後看護婦の需要の增加と共に、同種の會の增設を見る。近來新設せられたるもののみにても其數二三あり。

赤十字社の看護婦は二十歲以上三十歲以下の獨身婦に限り、修業年間三ヶ年半、内一年半は學業、餘の二年は定期練習なり。其看護婦は何れも社費の養成にて、生徒には每月五圓、同候補生には同じく四圓を支給せり。赤十字社の看護婦は本社に於て養成せるのみならず、また地方の支部に於ても、其地の病院に托して、簡易速成の看護婦を養成せり。日清戰爭中各地方の赤十字社支部より、豫備病院に送りたる多くの看護婦は、如斯くにして養成せられたるものなり。また同社看護婦の責任としては、卒業出社後とても二十年間は身上に如何なる事故ありとも、國家有事の際、若くは天災の起りたる時には、本社の召集に應じ、看護の事務に從事すべきこととなれり。

赤十字社の看護婦生徒卒業後、同社病院勤務を望むときは、

一　等｛上給七圓五十錢／下給　七　圓｝　二　等｛上給六圓五十錢／下給　六　圓｝

三　等｛上給五圓五十錢／下給　五　圓｝

給料を支給せられ、また年二回二圓乃至五圓の額にて慰勞金あり。また外勤の時には、

一　等｛普　通　患　者　一日七十五錢／傳染病患者　一日一　圓｝

二　等｛普　通　患　者　一日五　十　錢／傳染病患者　一日七十五錢｝

の給料を受くるよしにて、私立看護婦會派出の看護婦が日當として受くる處も亦た此額に同じ。

慈惠病院の看護婦養成は、入學試驗に及第したるものは、六ヶ月は見習生として、病室勤務をなさしめたるのち、試驗を經て生徒となし、以後二ヶ年學業、實地の修業をなす。見習生には每月五圓、生徒には同七圓を學資手當として給與す。同院の看護婦、外に派出する時は、一週間最高九圓、最低四圓五十錢を得るといふ。

赤十字社病院に於て現今養成中の看護婦生徒は總數百八十人にして、慈惠病院内に在る看護婦は生徒、及び卒業生を合して七十三名なりといふ。また帝國大學第一醫院に於ても幾許の看護婦を養成しつゝあり。

報知新聞には現今、電話交換手なる女子の職業につきて記載しつゝありと雖も、未だ擧げて紹介すべき要處に至らざれば他日を期す。志かし同職業の成績に關しては、前號に他新聞の報導に基きて、既に聊か報導したるが如し。なほ又參考として左に寺田勇吉氏の記する所によりて、北米合衆國に於て、

各種の高等なる職業に從事する婦人の統計（千八百九十年度）を擧げん。

内外科醫	四、四五五	齒科醫	三三七	辯護士	二四〇
官吏	四、八七五	僧侶	一、二三五	工師及測量家	一八〇
建築家	二五	畫工及び彫刻師	一、一〇〇	著述家	三、〇〇〇
記者	八八八	音樂家	三四、五一八	俳優	三、九四九
劇場管理人	六三四	速記者	二一、一八五	寫字生及書記等	六四、〇四八
簿記者	二七、七七五				

勤儉と貯蓄

藤井淡海

（七）六世紀の宣教師

六世紀の半、即ち西暦五百五十年頃、ギリシヤに二名の宣教師あり。今其名を詳に知る能はざれども、ペルシヤより印度を經て支那に入りて傳道したり。當時の教法師たるもの、素より今日の宗教家の如く、經國濟民の念慮に乏しく、社會に縁故の薄きものにあらず。彼等歸任に際し、竊に蠶種若干を杖の中に仕込之を匿して、コンスタンチノポルに持歸りき。又如何にしてか此時白種桑樹苗若干をも持歸りぬ。而して之をペロポチツに栽培せり。斯て其翌年蚕を養ひ試みけり。今に此地をモレイと稱す、蓋しモレイは羅甸語のモリユスより轉訛し來れる語ならん、即ちモレイは桑樹の意義なりと。是れ歐洲養蠶の起元なりとす。然るに此當時の支那は梁の光元帝の世にして、承聖元年なりき。或る西人の説に據れば、當代の支那にありては、蠶種を外國に出すことを嚴禁し、若し之を犯すものあるときは重刑に處したりと云ふ。此時代にありて彼の二名の宣教師等が、辛苦經營して其蠶種と桑樹とを自國に獲たるの志や想ふべし。

然るにギリシヤ王は、此二名の宣教師に命じて養蠶術を研究せしめ、尋で絹帛の製造を創めぬ。當時亞細亞の絹匹は、稀に歐洲に渡來する程なれば、洵に貴重なるものにして、王公富豪にあらざれば、之を容易に獲ると能はざるより、當時の博物家にしても、其原質の吟味は、猶ほ未だ能はざる所なりしが、茲に始めて多年の疑團を氷解するに至りしなり。降て一千百四十六年にシヽリイ王第三世ロセイがギリシヤを攻めてコラントラアブ及びチクレポンの地を略取し、ヘロホチーヅより、多數の蠶織の業に熟達せるものを擒にし、之を自國に送りて、大に此事業を奬勵せり。就中パレルム及びカラブルの地方最も隆盛を極め、是より延て遂に伊太利の南部に傳へたり。伊太利蠶業の今日あるは、其起原茲に基因せるものなり。又佛蘭西の蠶織は、一千三百九年の頃に於て、羅馬法王クレイマン第五世の始めて之を傳へたりと云ひ、或は亦一千五百年の頃佛王チャレス第八世が、伊太利と兵を搆へて

チエプルスを征伐せしときに於て、蠶種及び桑苗を獲て、之を東南部に試養せしに創まれりと云ふ。

觀潮

（十九）神佛の祭禮と風俗壞亂

人情の眞髓たる宗教心を養ふ所、神聖にして犯すべからざる所、即ち宗教上の神格を祭る所なる神社佛閣、はた會堂といふもの、如何なれば氷炭相容れざる醜穢卑陋の事物と相伴ふとを爲す乎。

吾人は日本全國を通じて、神佛の祭禮には風俗壞亂の伴ふを認むるものなり、例へば、

●男子間に天神講あり女子間に觀音講あり其の會にて淫風を熱く多々なり●氏神の勢力漸次に衰滅す●盆踊あり男女淫行の媒介を爲す神佛は幾分か人民の道德心を支配するに相違なきも反て道德の腐敗を來すも亦職として此にあり●盂蘭盆會に男女混合して踊るときは男女無區別の甚たしきものあり神佛祭禮は飲食會讌散會に過ぎざるの觀あり●神佛の祭禮は衰弱の方なり其祭禮に往復の際大に男女の風を亂すものあり●男女の別正しからずして女子にして放歌狂奔するもの多し祭禮の時は一面識なきものも振り込んて宴に列するとあり●神佛の祭禮一に勢つよく彼の盆踊夜祭などには自由に交接するとを得るなり

等の談は吾人の屢耳にする所なり試みに各地方の人士に問へ、特に東京の近縣を旅行せよ、思ひ半に過るものあらん。要するに漸次氏神等の勢力減少し、今日、神佛の祭禮といふものは、宗教的觀念を養ふの能なくして、反て風俗を亂すの媒介となり居るとは、明白なる事實なり。吾人は之を事實といふ、紙上の論議には非るなり。蓋し淫祠邪教といふもの、何時の世にも風俗壞亂を伴はしむ。德川時代に於て淫祠を破壞したる事實を見て知るべし。猶太の神殿が商人の賭利場と化したりきとの傳説を見て察すべし。所謂東京の緣日は是れ一種の市場を開くもの、祭禮は仕事師等の金儲の種となる如き滔々として皆然り、斯の如き事實は信仰の冷熱を測るの尺度となすとを得るなり。然れども他の幾多の事實は敬神奉佛の信仰心を證明するもあれば、吾人は之によりて信仰如何を測るとは且らく措き、單に風俗壞亂の伴ふ次第を究めん。

神佛の祭禮は何が故に風俗壞亂の媒介となる乎、余想ふに、

一は敬神奉佛の念薄きを發表するものにて、神佛の祭禮に際して、不義を爲すは宗教的觀念淺きが爲めなり。

二は神佛の祭禮は地方に於て期節を定めて之を行ふ、平生多忙の徒は今日を約して相樂まんとす。

三は地方は神佛祭禮の行はるゝ所、村落の片端、近傍の山林中等の僻地にあり、人目を避くるに好都合なり。されば神佛の祭禮が、風俗壞亂を媒介するに適する事情を有するが爲めに、惡結果を來したるにて、神佛祭禮に伴隨したる弊害に外ならず。今日の祭禮には殆んど宗敎的觀念なるもの伴はず、多くは一種の快樂の方便化したるものと認めざるべからず。神樂は神を樂ましむるにあらずして、小供を喜ばしむるものとなり。虚飾に流れ利欲を貪るの場所、いかで救世慰魂の道を與ふるを得んや。如何にして之を利用し、改良すべきやは、別問題に屬す。

（二十）　四國地方の社會狀態

元良博士は社會心理學上の材料蒐集の爲め、本年三月岡山より四國に出張せられ、其の觀察せられし一部に就て「哲學雜誌」に記載されしあり、是れ同記者が博士を訪問したる際、談話せられしものなりと云ふ。

抑も四國の地たる地小にして遐陬に位し而して變化極めて多し、讃岐阿波土佐の三國を比較するに、讃岐は農を主として國人の氣風一般に不活潑なり、西讃には多少企圖心あれども東讃は全く此心を欠き碌々として一生を終るもの多し、尤も敎育費支出等には寛大なりと云ふ、阿波人は多く商を業として頗る有爲活潑なり、而して土佐人は士氣に富み剛毅勇悍なり、されば土佐人は爭鬪の際には常に勝を得るも、利害の競爭に關しては損失を招くこと多し、之に反して阿波人は能く屈伏して後の利益を博するを怠らず、されど土州人は必しも剛直とは言ひ難し、往々邪僻に傾きて所謂非を遂ぐるものあり、又一般に理屈を好み、目に一丁字なき者も其行爲を咎めらるゝに遇へば必ず其行爲の理由を陳述せざるはなしと云ふ、然れども一般に武士氣質の盛なるは掩ふべからざるの事實にして、此點に於ては讃岐と正反對なり、讃岐は前述の如く不活潑にして全く士風を存せず、是讃岐人自身も怪訝に堪へずとなす所たり、同一島中の國にして然く氣質を異にするは如何なる理由によるか、或は曰く人種の差あるによると、或は然らん、博士は之に就きて謂へらく、四國の地もと蠻族四方に割據し或は相互に征服を事とし、後長曾我部氏起るに及びて悉く之を統一したり、其より後、國君數〻變じたり、されば四國のみに就て考ふれば頗る支那全國と其趣を同しくする者あり、是一方に征服者たる土佐には武士的の氣象を養成したると共に、被征服者たる讃岐の如き不活潑なる衆民、阿波の如き營利に汲々たる商人を生じたる所以かと云々、

明治評論紙上に「土佐人士の氣風」なる一文あり、完結を待つて紹介すべし、以上且らく記して參考となす。

（二十一）　明治維新後の國民の思潮

明治評論紙上、末廣一雄なる人、人種問題を論じ、「人種思想は思想中の王なり、學說中の中心點なり、經綸策の根底なり人類が行步する大目的の歸點たり、人間意思の窮極點なり」と云ひ、更らに明治維新後の日本國民を指導したる思潮に及び、之を五期に分てり。即ち

第一期　民權說　實利說　自由競爭說　世界主義
第二期　人權新說
第三期　國家主義
第四期　國粹顯彰說
第五期　對外思想　自主的外交

等なり、而して此思想の趨勢は決して第五期に止まらず、將さに第六期の人種思想に一轉すべしと論じたり。人種問題は蓋し世人の深く注目せざる所今後斯の如きものあるは勢ひならん。吾人は右の如く特に期節を區分するの不可能を認む、唯大化の傾向を表はしたるものと知るべし。完結を待て更めて評すべし。兎に角面白き文なり。

評論

德義的問題に就て
世間大方の解釋を求む

文學博士　加藤弘之

従來未だ曾て十分の解釋を得ざる德義的問題は種々あるべけれども先づ氣附きたる二問題を提出して廣く世間大方の解釋を求めんと欲す是れ學問上頗る有益にして併せて興味あるものと考ふればなり

○○○其第一は宗教に關せる問題なり日本人は宗教に冷淡なる國民なりとのヿは屢聞く所なるが日本人は果して宗教に冷淡なりや否（第一）若し果して冷淡ならば丌は如何なる原因に出るものなるや（第二）と云ふの二個の疑問は學問上に於て解釋に十分價値あるものと思はる然るに日本王朝時代より維新前迄の歷史を觀察するときは佛敎の勢力は其間自ら盛衰張弛の違ひはありしも隨分熱心に歸依せし者決して少からず奈良平安の兩朝に於て帝室貴族の信佛は決して尋常のヿにあらず塔堂伽藍の爲めに國帑の空乏を招くに至りしヿさへ少からず降りて鎌倉以後武家の世となりし以來も名門豪族の信佛是亦盛なりき尤も德川幕府に至りては儒道盛に用ひらるゝヿとなりしより形式上寺院僧侶を崇敬するにも拘はらず信佛の傾向は頗る減退したれども併し下流社會に至りては信佛の念決して衰ふるに至らざりき加之信仰の點より云へば儒道も亦一の宗敎として視るべき有樣なりしかば德川幕府三百年間上流社會の佛敎の信仰は衰へたるも之れに代はりて儒宗敎の信

仰は非常の勢力を得たるものと云ふべし併し維新の大革命に及び儒宗教の信仰は頓に衰へ従來孔子を以て實に空前絶後の大聖となし孔子以前孔子なく孔子以後孔子なしとせる思想は遂に消滅して今日にありては其教旨をも是非するとはなれり但し下流社會の信仰物たる佛教も維新後は稍衰へたるが如きも維新の初めに於ける廢佛論も遂に奏功する能はざりし程のとなれば佛は儒に比して猶信仰を維持すること大なりと云ふべし

右の如き有樣なれば日本人の宗教に冷淡なりと云ふとは維新前には其蹤迹を見ると殆ど難ければ唯維新後の現象に過ぎずと云ふも不可なかるべし維新後今日迄の有樣に就て觀察すれば少なくも上流社會の宗教に冷淡なるは實に疑ふべからざるが如し但し佛は猶今日信仰を失はざるも是れ多くは下流社會に存するとにして上流社會は葬祭の禮等に於て敬佛の形式はなきにあらざれども眞に信佛の心ある者は多からず唯近來往々佛典を講習し又は禪學に志す者なきにあらざれども是等は多くは信佛の點より出でず寧ろ一種研究の志より出るが如し去ればとて新來の基督教が盛に歡迎せらるゝ歟と云ふに是亦最初の勢ひにも似ず今日は殆ど其進歩を止めたるが如し果して然らば維新後に於ては唯下流社會を除くの外は宗教心は頗る冷淡なるに相違なきが如し

然るに此の如き現象は抑如何なる理由より出でたるものなるや支那の如きは漢唐以來專ら儒教を信仰し孔子を尊敬すると非常にして今日と雖も殆ど變ずるとなく近今歐洲の風潮に動搖せらるゝも信儒尊孔の心は毫も滅する所あらざるが如し又土耳其國の如きも國初以來マホメットを信仰するの心上下擧て同くして其經典たるコーランは獨り宗教上の經典たるのみならず併せて國家の憲法たる大勢力を有するものなりと云ふ而して數百年來基督教國民との交際をなすも之に由て毫も固有の信仰を失ふとなし支那や土耳其や斯く古代傳來の信仰を固守して世界の新空氣に浴せざるは是れ即ち今日の文明開化に進む能はざる所以にして傍觀すれば其古來傳來の宗教心は取りも直さず國家の衰頽を招くの具たると明々瞭々たりと雖も其國人は猶此理を悟る能はずして却て得々たるが如し然るに日本人が維新前上流社會に於ては孔子を尊崇し儒道を信仰すると殆ど支那に劣らざりしにも拘はらず維新後盛に歐

洲の開化を取るに及び俄に尊孔信儒の心を棄て敢て顧みず遂に今日に至りて孔子を是非し儒道を批評するとなりしは抑如何なる理由に出でしものなるや殆ど解すべからず此世界稀有の現象は學問上の研究に於て頗る價値あるものとすべきに非ずや因て余は此一大問題を提出して大方諸家の解釋を求めんと欲す

○第二の問題は多少穢陋に渉れるものにして學問上の問題となすには適せずとの誹りあるやも知るべからざれども凡そ德義的問題中に大穢陋なる事も到底免るべからざるものにして却て必要なるものと思考すれば余は忌憚なく之を提出せんとす即ち他にあらず賣淫が何故に悪しきとなるやと云ふの問題なり余が今此の如き問題を提出するときは世人は余を以て賣淫を善しとするが故に此の如き問題を出せしならんと推測するともあるべしと雖も決して然るにあらず余も亦賣淫を悪しと信ずるとは毫も世人と異なる所なし然れども凡そ社會一般が從來或は善とし或は悪とする事柄に就ては誰も敢て其理由如何を問はず無論に善なり悪なりとなし居る所の事柄甚だ少からず一般世人が無論善なりとし悪なりとするは敢て差支なかるべしと雖も苟くも道德の理を研究する者にありては世人が善なりとし又悪なりとする事柄に就て其善なる所以其悪なる所以の理由を探討するは研究上甚だ必要のとせざるを得ず然に右賣淫を以て悪なりとなすの理由に至りては蓋し決して單純なるものにあらずして種々湊合せるものなるやも知べからざれども就中其の重なるものは如何なる點に存するとなるや從來是等の事が學者の問題に上りたるを聞ず因て余は先づ試みに從來賣淫の悪しとせらるゝ理由なりと思考する數件を左に擧げんに

第一男女の情交は一夫一妻に限るべきものなるが故に賣淫は悪なり

第二萬物の靈長たる人間が其身躰を他人に賣る（假令一時のとなるも）が故に賣淫は悪なり

第三萬物の靈長たる人間が其身躰を他人の娛樂に供するが故に賣淫は悪なり

第四人生に於て最も羞耻的なる淫を賣が故に賣淫は悪なり

第五社會の風俗を壞亂するが故に賣淫は悪なり

猶此外にも理由視せらるゝものゝ種々あるやも知らざれども先

づ重なるものは以上の如なるべし然ども余は未だ服する能ざれば順次に其理由とするに足ざるべしと考ふる所以を述ん

第一男女の情交は一夫一妻に限るものなるが故に賣淫は悪なりと云へる理由は頗る立派なるが如しと雖も是れ唯歐米の如き一夫一妻の國に於て云ふべきことにして一夫數妻(妻と云ふは必ずしも妻に限らず妾にてもよろし)の國にては理由とならざるなり何となれば日本支那等の如き一夫數妻を許せる國にても賣淫は決して善とせざればなり

第二萬物の靈長たる人間が其身躰を他人に賣るが故に悪なりとの理由も亦理由とするに足らず何となれば萬物の靈長たる人間が其身躰を一時他人に賣るは決して賣淫に限るにあらず婢僕等が一時他人の爲めに使役せらるるとも亦一時他人に身躰を賣に外ならざれども婢僕の業は決して悪とせざればなり

第三萬物の靈長たる人間が其身躰を他人の娯樂に供するが故に悪なりとの理由も亦同く理由とするに足ず何となれば役者相撲取の類も亦其身躰を他人の娯樂に供する

者なれども演藝相撲の類は決して悪とせざればなり

第四人生に於て最も羞耻的なる淫を賣るが故に悪なりとの理由も亦理由とするに價値なきか如し何となれば若し淫を公然稠人廣座中にて賣りたらば其は甚だ悪しかるべけれども賣淫は必ず隱密を旨とし決して稠人廣座中にてなすものにあらざれば即ち羞耻的の事を羞耻的に取扱ふものと云ふべければなり

第五社會の風俗を壞亂するが故に悪なりとの理由は前諸項に優りて最も力あるが如し賣淫の風俗を壞亂するは紛れもなき事實なり然れども密賣淫が最も風俗に害ありとて寧ろ公賣淫を許すは吾が邦の法なるのみならず歐洲にも議論のあることなり密公共に均く賣淫に外ならず加ふるに賣淫を嚴禁すれば遂に和姦の流行を惹起して其害は賣淫よりも數層大なるべしとの憂慮もありて至極尤もなることなり果して然らば比較的研究を以てすれば賣淫も亦其悪たる性質に於て最も甚だしきものなりとは云ひ難からん但し道德上より論ずれば大小の悪皆均く悪にして決して許すべからざるものなれども假令

已むを得ざるにもせよ法律が默許若くは明許せるとは絶對的悪とは云ひ難かるべし因て考ふれば此第五の理由も未だ圓滿なる理由とする程の力はあらざるが如し猶此外種々理由とせらるゝものもあるべけれども余は未だ考へ當らず猶熟考すべし

以上第一第二の問題に就て余も聊か講究せざるにはあらざれども未だ熟せざる所あれば先づ世間大方諸君の解釋を乞はんと欲す余は是等の解釋を以て學問上甚だ有益なるものと信ずればなり諸君は以て如何となす

小公子の飜譯者若松賤子君

故巖本夫人追悼會席上　森田文藏述

來會の内外紳士諸君、淑女諸君、私森田文藏は故巖本夫人に就ては多くを知るものでありませぬ、私は夫人の生前に未だ嘗て一度も拜顔のをりを得ませんでした。但だ小公子の前篇の飜譯が始めて一册の本になりました時に、巖本君が其本を御贈り下さつたので、始めて若松賤子君なる飜譯者あるを知つた位に止まるのです。併しこの唯だ小公子の飜譯者としてのみの若松賤子君、リツトルロードフホントルロイの飜譯者としてのみの若松賤子君だけでも私が、否や獨り私のみならず世界が長く忘るゝと能はざる所の者であります。

世間では飜譯といふことは大さう爲し易いやうに思て居る人が多い、何でもないやうに思ふて居る人が多い。然し決してさうで無い。昔支那春秋戰國の時趙の軍師の馬服君といふ人の子に趙括といふ男があつた、其男は平生軍の事を議論するのが大さう上手で、誰も皆な其説に感心せぬ者はなかつた。然し馬服君は常に之を心配して、内の悴は若し軍に出たら必らず負るだらう、軍と云ふものは極めて六ヶ敷命がけのものであるのに彼は大層容易さうに話をして居る、あれでは必らず負けるだらうと言つてをつた。其の後初めて軍に出たが、果して散々に打負けて遂に打死をして仕舞ました。今の世間の人は極めて六ヶ敷飜譯と云ふ者を大さう容易さうに言ふ、宜べなるかな其の飜譯の皆な敗績に終ることやです。維新以來粗譯惡譯は澤山出來ましたが善良な飜譯といふものは澤山ありませぬ。抑も飜譯とは如何なる事歟。唯だ外國の言葉を讀で、それを日本の言葉に直す、夫が六ヶ敷といふの歟。學校で三年乃至五年も、外國の言葉を學だならば、大抵其外國の言葉を解するだけのとは出來る。又た凡そ小學校を卒業した以上、史記左傳をぼつ〳〵讀む以上の人であるなら、自分の心に分つてをることを、日本の言葉に書き現はすことだけは大抵出來ない者はない。然れば外國の言葉を讀で、其讀で分つたことだけを日本の言葉に直して夫で飜譯の能事が畢ると云ふなれば、そんな飜譯なら誰でも出來る。然かし飜譯と云ふものは通辯ではありませぬ、通辯とは違ふ。飜譯に第一必要なのは、其飜譯をする人は、原作者即ち元と其の小説ならば小説を書いた作者、其原作者と同じ人にならなければならぬ。同じ人になると云ふのは、原作者が怒る所は共に怒り、喜ぶ所は共に喜び、原作者が涙を揮つて書いた所は、自分も涙を揮つて之を書き、ひつくるめていへば、原作者と反感及同情を共にして、自分が原作者と一心同體となることです、即ち此處が六ヶ敷のです。マコーレーの文章を飜譯するには、其人もマコーレーにならなければならぬ、其人は外の處に於てはマコーレーたることを能はずとも、マコーレーの文章を飜譯する間だけは、其喜ぶ所怒る所熱心する所、悉くマコーレーと同様の人に

ならなければならぬのであります。然るに世間多くの飜譯者は如何です、西洋の言葉が讀める、其の讀むことを日本の文章に書き現はすことが出來る、唯だ此だけです。此だけでは只だ通辯である、通辯は言葉の意味を紹介すれば夫で宜い。然かし飜譯者は最一つ進で其の精神に於て同化せねばならぬ、茲で乃ち飜譯者は通辯と違ふて、誰の作をでも飜譯するといふことが出來なくなるのであります。通辯なれば只其言葉を取次ぎさへすれば宜い。然かし飜譯者は其精神をも取次がねばならぬ、故に飜譯者は己れが其の精神に於て、同化し得る原作者と同化し得ない原作者と有つて即ち自分が飜譯し得る作と、得無い作とを生ずるので有ります。從來西洋の大家の文章を飜譯した者は澤山あります、有りますけれども其の飜譯者が果して原作者に同化して居ると見える飜譯は極めて少ない。然るに若松賤子君が御譯しになつた小公子を見ると、實に原作者の精神が其の儘に活きて現はれて居る。原作者バーチットは、書中の主人公フォントルロイは勿論、其の母親、其の祖父ドリンコート侯爵ホッブスといふ萬屋、何とか云ふ靴磨き其他一切の人物に向かつて、實に溢るゝばかりの同情を持つてをる、而して若松賤子君の飜譯には亦た同じ同情が同じ人物の上に行き渡つて居る。私は平生澤山の飜譯を讀だ、然かし感服をしたのは極めて少ない。然るに特に小公子に於ては、謂ゆる覺えず頭低れて地に至ると申すので、實に敬服したのであります。原作者の同情は即ち飜譯者自からの同情となり、原作者の笑は即ち飜譯者自らの笑となり、原作者の涙は即ち飜譯者自らの涙となる、私は最も此點に敬服するのであります。外の時はいざ知らず、小公子を飜譯せむと欲して筆を執り紙に臨まれた其の時は、若松賤子君は即ちバーチットになつて居るのです。飜譯は即ち原作になつて居るのです。私が否や私のみで無い世間の讀者が之を讀で、多く手の舞ひ足の蹈む所を覺えぬまでに、恍惚として感心する者のあるのは即ちこれ故であります。

又た單に外國の言葉を讀で而して之を日本の言葉に直すと云ふ丈けに就ても、亦

た他の多くの飜譯者に勝つて、稱贊すべき處が澤山あります。先づ若松賤子君の飜譯を見ますると、如何にも善く原文の意味を了解して居らるゝことが見える。――勿論他の飜譯者にせよ、飜譯でもする人で有りまするから、其の原文の意味の分らないと云ふやうな人は有りますまいが、若松賤子君のは、それが如何にも際立つて、其の原文を見て如何にも一目の下に瞭然と其意味の微細曲折の御分りになることは、丁度日本の平生の言葉を聞くやうに御分りになる者と見える。其の證據は、一例を擧げれば、强愎我儘高慢なる老侯爵の言葉はさも左樣らしい口氣に、幼年な無邪氣のセドリックの言葉は、又たさもそれらしい口氣に悉く微細に其の差別が飜譯の上に現はれて居る原文に勿論其の差別がある、然かし此處まで善く讀み分け嚙みくだく人と云ふ者は、なか〳〵一寸得難いのであります。又其の讀み得たる處の者を、日本の言葉に書き現はされた上に就て、大に稱贊すべき處があります。私は小公子を讀で想像するに、若松賤子君は他の總ての學問に非常に秀でゝ御出になつた割合には、漢文學和文學の上に就ては或は夫程に秀でて御出にならなかつたか共疑ふ。然かし其書かれました文章を見ると、誠に立派なものである、平易である、優美で少しも卑しい汚ない處がない、どんな賤い事賤い言葉を寫しても少しも卑汚な處がない。是れは蓋し飜譯者其人の人品が、文章の上に現はれて文品となつた者でありませう歟。優美であつて而かも平易なのです、此れが甚だ稱贊すべき所です。優美は決して畫の多い字や、今の世間に耳遠い死んだ言葉を、並べる文章の上にばかり存するものでは有りませぬ。我々が日常の談話の間にも隨分韓柳の文章や源氏物語の文章に、勝りたる優美の文章が存することが出來るのです。又た他の言文一致、――小公子は言文一致で書てあります、他の言文一致と云ふ文章を見ると、大抵其の人が此より外の書き方も出來るのだけれども、思ふ所有て、斯う云ふ風に態と書くのだと云ふ痕跡が見える、即ち不自然な痕跡が見える、自然を缺いで居ると云ふ痕跡が見える。然るに小公子の文

章を見ると、このスタイルより外かには、此の文脉より外には、外に世間に文章の書き方といふ者は無いかの如く見える即ち少しも態とらしい處が無い尤も自然を極めて居る。抑も文章に於て、平易で優美で、夫で自然であれば、此の外に復た何をか、求める處あらんやです。故に私は平生小公子の文章を以て、一種の文脉の稍や完全に近い處に迄で發達した者だといふて居るのである。

モッ一ッ私が小公子に就て感心して居るのは、始めて小公子を讀みました時に文章の書き方が、どうも決して一遍に書流たものでなく、頗ぶる苦心して書いた者であるやうに、想像されたとでした。處が此間毎日新聞に揭げてある記事を見ますると、若松賤子君は其の永眠なさる少しばかり前迄も、小公子後篇の原稿を頻りに直して居られたといふことであります。然れば、私が最初想像した所は果して違はず其文章を書くには餘程度々改修なさつたと云ふことは明かであります、世間には文章を書くに一氣呵成と云ふことを貴び早く書くを勝とし、或は翰を揮ふこと飛ぶが如くとか、筆を下せば千言立どころに成るとか云ふて、珍重することですが、是れも勿論結構なことです、且つ時と塲合によつては、是非とも斯うありたいことですが、然かし文章は書き流しに限るといふやうに思ふては、大變違ひます。一氣呵成の處に妙味の存する文章も多い、然かし善い分別や、善い知慧は、二度目三度目の考の中から、どうしても出て來ると同じで、文章も書き流しには、匆卒な粗末な處が多くて、二度三度と手をかけぬと、善い文章になり難いもの、多いもので有ります。若し其一遍書いた後ちは、どう直さうと考へても、夫より善い考の出ぬといふのは、即ち其人の文章に就ての考の源の、甚だ淺いのを證するものである。

昔し賴山陽が、九州へ參りました時に、佐賀の古賀穀堂の所を尋れて、穀堂は珍客が來たので喜んで共に酒を飲んで、詩を作つた。穀堂は例の一氣呵成で長篇大作立どころに成ると申す工合で、ズンズンと長い詩を作つた。山陽は實に舌を卷いて迚も自分は及ばないと考へた。夫から又長崎の方を廻はつて、歸りに再び穀堂の家に立寄つて、もう一遍先日お前の作つた詩を見せて吳ろと云ふた。穀堂はそれを見せた、手に取りて見ると先日作つた儘で、一字一句も直してなかつた。山陽は默つて其の詩を返したが、腹の中で斯んな奴ならば少しも恐るゝに足りない、最初は大へん長い詩を咄嗟の間に作つたから、實に驚くべき才氣であると思ふたが、數個月もたつても、一字一句も直して無いのは、もう是より上の善い考は出ないのであると見えると、大に之を輕ずる心になつたと云ふことであります。山陽とても一氣呵成は出來ないことはない、又た其の一氣呵成のものでも、勿論觀るに足りないやうな極惡な者ではない。然かし其上を直し又た直すから、益々善くなつて、そこで當世に顯はれ後代に傳はる樣な、立派の者になるので有ります。若松賤子君が、文章を書くに、飽くまでもぞんざいでなく、丁寧愼重であつたと云ふとは、又た文章を書く心掛として、大に嘆賞すべきことであります。

以上申しました所を引くるめて言ひますと、小公子と云ふ一書は、維新以來出來て居る澤山の飜譯の中で他に多く比類を見ざる、第一等の善良な飜譯であると云ふとなのです。即ち私は否や我邦の文學世界は實に斯の好飜譯手を喪ふたとを、返すがへすも悲み惜むのであります。

夫婦家に居て相互に親愛す可きは當然にして傍より勸告するにも及ばざる所なれども其の親愛の外に敬意なかる可らず。凡そ人を敬するの法、樣々なる中にも之に告ぐべき事を告げずして隱すより不敬なるはなし……

……福澤諭吉君

宇宙實躰私慾論

青柳猛

昔者グリースの學者は宇宙の實躰を論じて、或は水なりとなし火なりとなし、或は風なりとなしアトムなりとなし、近世の學士家また之を解する種々なりと聞く。然れども見よ、眞理は最大パラドックスなり。宇宙は廣大なり無邊なり、新羅萬象は萬別なり複雜なり、之が實躰眞相なるもの、如何でか一人者が其有限の智能推究の力によりて會得せらるゝことを得んや。有限の器は決して無限の量を抱有し得るゝものに非ず。されば學士家が宇宙の實躰に關する紛々たる所説の如き、亦各々其眞相の一部を窺ひたるものにして、共に謬りなしと雖ども、去かも之を以て宇宙實躰の全豹なりといふべからず、唯その一斑たるのみ。さればカーライルが叫んで、宇宙の眞相は樂なりといひしが如き素より不變の眞理にして、その着想の凡ならざるものあるは吾れ人の共に驚嘆する所なりと雖ども、これ又盾の一面を見たるものに過ず。茲に於てか余輩は更に一箇の臆説を出して、宇宙の眞相宇宙の實躰は私慾なりと云はんとす。されど此論議素より亦宇宙實躰の一面は私慾なりとの意に外ならざるなり。

かの固躰を見よ、液躰を見よ、氣躰を見よ。彼等分子の間には凝集力なるものありて、互に相吸引し各共に他を己に引つけんとするに非ずんば、氣躰分子の如く己が意のまに〳〵各他を離れて相去らんとするなり。互に相吸引するは是れ私慾、なり。他を離れて去らんとするこれ私慾なり。吾人々類が棲息する此地球が、今日此る形躰を持し巧に太陽系統中に運轉して、敢て飛散分裂することなきは、これ地殼をなす各分子の間に此凝集力なるものあるがために非ずや。然り而して此の一地球なるものは、亦己が周圍にある凡ての物躰を吸引せんとして、其引力の作用を近きは人間禽獸草木大氣の類より、遠きは月球其他の天躰に及ぼすに至る。而して引力といはゝ又これ私慾の意に外ならず。然らばこの地球はこれ私慾の結塊なりといふも敢て過言に非るべし。

是より又眼を放つて太陽系統なるものを見るに、太陽は凡ての天躰を皆な己れに引きつけんとし、各個の天躰も亦太陽及己と異る他の天躰を吸引せんとして、各々其引力を他に及ぼし、茲に始て絶妙不可思議なる調和起り、天躰の運行を見るに至る。然らば太陽系統なるものは私慾によりて搆成せられ、

私慾によりて運轉せらるる、私慾の塊に外ならざるべし。雨何が故に滴をなすか、器具何が故に器具の形を取るか、衣服何が故に衣服をなすか、これ其間に私慾なるもの丶力を逞うして働くものあるが故に非ずや。求心力これ私慾なり、遠心力又これ私慾なり。世何物か私慾の結塊ならざるものこれある？世何物か私慾の顯現ならざるもの これ ある？又人を見よ。人はその自存のために日夜勞苦し、死を見る蛇蝎の如く少く身常ならざれば直に走りて醫師を訪ふ、これ私慾なり。宗　敎何物ぞ、天地の靈に接し、品性の圓滿なる發達を望み、救拯を　希　ひ來世の冥福を祈り、神明の怒を免れんとを欲す、これ私慾なり。戀何物ぞ、男子は女子を慕ひ女子は男子をもとめ、互に相愛せられ各々其對手の獻身犧牲を要求す、これ私慾なり。智識學藝それ何物ぞ、これによりて人生を琢磨し、其本性を發輝せしむといふ、然れども畢竟するに又私慾の範圍を脱する能はず。其他草木が滋養分を地中に吸ふが如き、禽獸が人類と等く己に危害を加ふるものより免れんとするが如き、皆な私慾に外ならざるなり。此の如く觀じ來れば、天下のもの一として私慾によりて存せざるものなく、動かざるものなし。私慾私慾！是れ乃ち宇宙の法則にして凡ての存在は、たゞ私慾によりて始て存在を得るものなるを知る。故に以為らく、宇宙の實體は私慾なりと。然れども人或は愛國心博愛の精神及人類の發達進歩社會の改良眞善美の闡明を希望する精神の如きは、私慾の範圍に屬するものに非ずといはん。されど是れ恐くは誤れるものにして、是等の精神は却てこれ私慾の大なるものには非る乎。己れ一個を愛するが如きは之れを私慾の最も小なるものと稱すべきも、己が屬する國を愛し、その光榮を企圖するが如き、これ私慾のやゝ大なるものなるべし。その發達して博愛の精神となり人類全般の幸福を希　ふといふが如きに至つては、前者に比して其私慾の度の更に甚しきものあるを見る。此くの如くにして己が隷屬する人類なる大團躰の幸福を增進するを以て倘ほ足りとせず、饑渇無限の宇宙に磅礴たる眞善美を追ひもとめ、之が光輝を輝かさんとするが如きに至つては、私慾も又その極に達せりといふべきなり。故に曰く愛國心も私慾なり、博愛心智識慾皆私慾なりと。茲に至りて個人の幸福を　希　ふの小私慾は國家の幸福を　希　ふの大私慾に併吞せられ、又この國家を愛す

るの大私慾も、人類の幸福を希ふの更に大なる私慾に對しては小私慾となりて之が犧牲たり、最後に人類の幸福も時には宇宙の大意識のうちに沒却せられざるべからざるものあるを見る。依て之を達觀するに小私慾は常に大私慾の中に沒却せられ、小幸福は大幸福の犧牲たらざるべからざるは、これ乃ち千古動かすべからざるの天意なるが如し。かの礦物が植物生存の犧牲に供せられ、植物は又同く下等動物のためにその存在を維持するの材となり、下等動物又遂に高等動物衣食の料となるが如きも、小私慾は常に大私慾の犧牲となるものなりとの意に外ならざらん。之を礦物の私慾より云へば永久にその存在をたもち、植物を養ふの材となるが如きは素より其好む所に非るべし。然れども天意によりて、植物なる者の其存在を欲するてふ更に大なる私慾の爲めには、この小私慾は擲たれざるべからず。植物の下等動物のために其私慾を擲ち、下等動物の亦高等動物の私慾のために、已が私慾をすてざるべからざる如き、蓋し其理皆な一なり。古聖の語に凡て天に逆ふ者は亡び天に順ふ者は榮ふと。この言もし誤りなくんば、私慾豈に必ずしも卻くべきものならんや。私慾はこれ

宇宙の法則なり實躰なり眞相なり、私慾はこれ天意なり。故に人よろしくこの私慾の法則にこれ適ふを希ひ、大に私慾心を盛ならしむべきなり。私慾心なるもの決して悪きに非ず、たゞ人の小私慾に句々齷齪して、大に私慾心を發起しこれに驅られ是れに動かされて動かざるの悪きなり。これ尙ほ盜の悪しきに非ずして小盜の悪きが如し。故に曰く人、益々其私慾心を大にせざるべからずと。

雜録

落穗（新作謠曲）

明石居士

○○シテ　ルツ　　○○ツレ　オルパ

○母　ナオミ　　○○ワキ　ボアズ

次第三人　憂を心の友として〳〵故郷さして急がん　母詞　是はカナンの孀婦にナオミと申す女にて候。我此程モアブの地に住み候ひしが、夫に後れ子に先立れ、今はたよらん蔭も無くなり候へば、故郷カナンへ歸らばやと存候。又二人の媳の候が

とむるも聽かず、こゝまで送り來りて候。今は身の暇を遣はさばやと存候。如何にルツ、オルパもこれ迄送り呉候志眞に嬉う候。今は御歸候へ。扨も汝等の不仕合さよ。偕老と契りし夫には連添ふ樂も遂げなくに、惜しや無常の夜嵐に揃も揃ひて死別れ、殘らでもよき老の身の、なまじいに生きさらばひて、又もいくその憂なやみ受んとや。世に乏しきしひとめに從ふより、里には父御母御もおはすなる、いましらの上惡うは計ひ給はじ。いまだ盛の花の身の、我儕にも增す良緣の左こそはあらめ、早く安身處を得て孫ひまでの世々までも榮え玉へ。願くは万軍のエホベ、厚くふたりを祝み、前途後榮を護り玉へや。シテツレ「うたてや母上の御言葉、おんいつくしみ餘りて恨めしう侍り。兎ても角ても幸なきわれら、いづく迄も御伴申候はめ。年老たまひし母上を路も遙けき故鄕に、一人は逝せ參らせがたし。唯伴ひてたび玉へ。

母「耻かしや何事も廻る車の我身の業かたらば懺悔となりやせん。同「抑も我儕イスラエル人は神の選民と稱へられ、いにしへ摩西の力にてカナンの地に移りしより、他國離散を不德とし、同族嫁娶を律法とせしに、われら早く國を出でゝ義務を缺ぎ、異邦人を婦として律法に背きたればこそ、エホベのみ手は我に臨みて、かくは幸なき身とはなれ。自ら作る孽の延きて汝等まで此上も惱さばいかに苦しき事さうぞ。去れば母の爲めとも思ひておん歸りあれよめ御達。ツレ「斯程まで宣ふものを聽分けず、猶否みまつらば不孝ぞかし。ルツどの心は知らず侍れども妾は仰に從がはん。母「さらばルツ、御身も心飜へし、涙とゞめて歸るべし。地「あれ視玉へよ妯娌は早きゝ入れて、親元さして還るなり。名殘は盡じ、いざ去らば、遲ゝしてオルパにおくれ玉ふな。シテ歌「かへらじと兼て思へば梓弓〳〵引て再び母上に別れ歸れとな仰さぶらひそ。妾は母上のいゆき玉ふ處に往き、宿り玉ふ家に宿り、心ばかりの御介抱、オルパどのゝゐたまはずば猶更に、妾は心定め侍り。母の御國はわが國、母のおん神はわが神。よきもあしきも母上と唯もろともに倶し玉へ。若し死別ならずして別れまゐらすとあらば、エホベ妾にかく爲し又重ねてかく爲したまへと誓言に今は止めんやうもなかりけり〳〵母同「さらばこなたへ來り候へ。急で參り候べし。道行「日の向かふそなたやしるべ旅衣〳〵、露けき袖をしぼりつゝ、心細く

も親と子の、足引の、山川里を越え〳〵て、いつしか日數ふる里のベレツレヘムに着にけり〳〵。母詞「いかに里人、見忘れ玉ふか。ナオミこそ歸りて候へ。

狂言「シカ〳〵

アキサシ「ころしも卯月の刈入時、大麥畑のあぜ〳〵におひも茂れる瑞穗には房また房を垂れて實いちじるく、鮮き色は黄また黄を染めて、さながらこがねの結れるに似たり。歐塞滿篝汚邪滿車の取入に、鎌もて刈る者、束ぬる者、うしろにつきて落穗を拾ふ者、あなたに立ちこなたに屈み、鄙曲の應和おもしろく、分けゆくあぜの足元より舞ひあがりて高く雲井にうたひゆく雲雀さへことしの豐作を天の寶座に奏聞するとぞ覺えたり。男「かやうに候者は此ベレツヘムの長老にボアズと申者にて候。扨も我れ數の畑をもち、折柄刈入時にて候へば今日も亦畑を見廻申さばやと存候。又此の程モアブの地より來りしルツと申す殊勝の者の候が、母を養はん料にと日毎に參り落穗を拾ひ候。殊に母のナオミは我に近き身内の者にて候間、隨分目をかけ落穗を拾はせ申て候。今日も參り候はゞ、刈者に申付け、便宜を得せ申さばやと存候。

シテ一聲「ちりの世の重きなやみも我神のみ手にまかせてやすらはん　地「あるに甲斐なき行末も、賴むは神の力のみ。落穗に繫く身のいのち庭に餌あさる雀にも増して拙き果報かな。

アキ詞「それなるはルツにて渡候か。日毎の勤苦左こそと存じ申候　シテ「これはボアズ殿の御入にて候。此程の御惠み、母も蔭ながら厚く御禮申居候　アキ「これも御事の志をめづればにて候。扨刈入も今明日にて事果申候間、明晩は聊か饗筵を設け、人々を勞ひ申さばやと思ひ候。御事もおん入候へ。最早餘日もあらざれば急て落穗を拾ひ給ふべし。シテ「仰あり難う候、さらばおん招に與り申べきにて候。又落穗も今日あすと候へば急ぎ又拾ひ申さうずるにて候。セル「扨も此後は何となる子の村雀、身の末いかに白雲の旅手の思ひよしなや。何事も神の助け人の情を力にて、いざ〳〵おち穗拾はん。

ツレ地「それ身を觀ずれば岸額根を離るゝの草、命を論ずれば江頭繫がざるの船。サシ「實にや恩愛義理の親子と生れ來て、世を空蟬の唐衣、男「たち舞ふべくも荒栲のつゝれに物も垂乳根を養ふばかりに鄙のわざ、落穗を拾ふはかなさに昔を思ひ出汐の、引きて歸らぬ人ぞ戀しき。ツレ「翠帳紅閨に枕並べ

し其昔、衣々の別をだに恨みしに、げに人の身は槿花一日の栄、それよりもろき朝露と消にしのちは夢にのみ色むらさきの其ゆかり、殊に恩愛いと深きいろはの君の其ために盡す此身の何厭ふべき。朝は蚤起、拾ふ落穂のほの暗き手元の見ゆるそれ迄と日毎々々の畑かせぎ。シテ「げにや浮世のたゝずまゐ地「盈る虧るはあの山に折柄懸る三日月の入方近き西の海、ためしを引くも影うすき弓張月の親と子が身を掩ふ雲の打晴れて、いつかは恵み久方の長閑き世をば望月の今を昔と語り草、いざよひのためらはで神の道すぐにゆきなば立待に、果報は居待臥待月の唯ためのめ、めぐみある神を力にいざや歸らん。母詞「ルツの御かへりにて候か、日毎の働き辱う候。

シテ詞「さて刈入も今日明日と成り申て候。去りながらことし一冬の糧は聚て候へば、御心安く思召候べし。又明晩はボアズ殿に刈入いはひの催しの候て、妾も招かれ申して候。

母詞「それは一段の事にて候。よき序にて候間、母が此程考へ申し事の候、近う寄り候へ。何と心得候か。シテ詞「覺束なくは候へども、何事も母上の仰せ、試み申候べし。

狂言「シカ〳〵

ツキ詞「扨も昨夜ルツのおん参り候て、我らを贖業者なれば行末たのむよし申されて候が、故障の義の候へば、一先歸し候處、今日は事落着いたし、われら全く贖業者と爲りて候間、急ぎルツ、ナオミを尋ね、此旨申さばやと存候。いかに此家にナオミの御入候か。母詞「此はボアズ殿にて候へ、待ちくらし申て候。扨あがなひびとの義は候。ツキ詞「事仔細なく落着申候。御身等を贖ひ申し、ルツは宿の妻と爲し申候べし。

母「荒嬉しや、ルツも喜び候へ。セル「老の身の心は關の障なくも、善はいそげの習なる。早祝言の用意せん。ロンギ地「何事も陰徳あれば陽報のあらでやむべき、年頃の孝貞苦節の冬も去り、この芽も春のけふの日や。シテ「よしや此身は埋木の、花さく春を又見んといつか思ひし、いつまでも唯たらちねの宮仕。地「盡くす誠は大神のむくいのなどてあらざらん。

シテ「こと邦人もまどゝろを。地「盡さば神の　シテ「めぐみあり。地「松の操の深みどり。ツキ「色香も妙なり我宿に　地「移し植ゑなば若竹の心のふしもいと直く、シテ「雪に霜にたへ忍びにし梅が枝の。地「一陽來復の今日よりや、花さき實り、子孫繁昌一家安全、ねがひを神にかけまくもあやにかしこき御

攝理かな。キリ地「かくて伴ひ立歸り、夫婦の契り淺からず、母は老樂家は富み、めぐみも重り、孫ひまご、ダビデ王の曾祖母と万代までも尊まる。實に孝貞の懿德こそめでたけれ、懿德ぞめでたかりける。

卒業の女學生に別れを惜みて

妻を失へる人を想ふ

有　美

さきには、智識の水を飲んで憂患を增し、智慧の果を食ふて憤激を多くせしが、今やまた情の泉に浴して痛苦の忍ぶべからざるものあるを覺ゆ。我が神我が神！如何なれば我れをこの校に送りてかくは苦め給ふぞ。我れは寧ろ始めよりこの迷宮に足を踏みいれざりしを希ふ。既に之に入れるのわれは再び道を得て出づるべからず。そのうちに迷ひ〳〵て益々深くすゝみ、遂に終らんのみ。嗚呼涙より救ひ出だされたりと悦びしは束の間の夢なりしか。涙より出でて涙に入る。我が一生遂にそれ涙ならんかな。然れども謝すべきは天なり、旻天の下無益の涙を溢れしめず、故なきに痛苦を與へ給ふことなし。人生の秘義多くはそのかげに隱る。かの己れと共にもの學びし、屆かぬ勝ちのこの我れをもなほ呼んで『先生』といふ人の女、如何に可愛く又なつかしきものぞ。人あり千金の寶を積んで我を迎ふるとも、我れこの群を後にすてゝ離るゝに忍びざるなり。されど何故と問はゞわれ自らそれを解せず。親の子を思ひ思ふて、故なきに之と別れを惜み給ひ、離れがたなきの心地せらるゝこと、それ斯の如きものならんか。われ學生と相別かるゝの苦を知りて、始めて親の慈仁恩愛の深さ廣さを覺りぬ。

卒業式のありしより越えて三日、園遊會を墨堤百花園に催さばやとて、船を牛込目付より出し、卒業生教師など打ち揃ひて皆な行く。夕暮にもなればまた船を出して歸りしが、われ當夜横濱なる友の許を訪ひ試驗休暇を幸に一週ばかりも泊りて互に情をかはさんとの約ありたれば、吾妻橋より諸子に別れを告げて船を下りぬ。下りし時は左までにも思はず、ただ少く名殘り惜き心地して、船のすゝむを看守る位に止りしが、雷門より鐵道馬車に乘る頃には、身何となく寂しさを覺え始め、え堪へぬ樣なりて女々しくもひた泣きに泣きぬ。

卒業！卒業とは悲しきことには相違なかるべきも、その榮を荷はるゝ人々に取りては、また何所にか面白げなる、樂しげなる所もあるべし。されど樂しみの影悅ひの形はこの我れに微塵もみえでたゞ悲しきのみ、苦しきのみ、茫然たるのみ。世に鳶に油上げをさらはれたる人とは此の如ものならんか。かの人々の顔を見ることまた二度とかなはざるかと思へば愈愈悲く、滊車に乗る前、暇を見て蠣めし屋の二階に上れど、何時の如く樂めず、涙のせき出でゝとめ兼るのみなれば、横濱に行くことは先づやめて、そのまゝ校舎にひッかへさんと、一度ならず三四度までも思ひつめたりしが、餘りに奇を好む如くにて惡しかりなんと、思ひとまりしも、わが吾妻橋にて別れしは如何にも無情の所置なりしとよと深く自ら慣りぬ。卒業を送るとは、これ波瀾多き人生の悲慘を味はしむるとの意に外ならねば、苦しとも〳〵言ふべき言の葉なし。われは實に磨き磨いて掌中にたくはへたる玉を盗み去られたらんが如き心地す。その父母たる人、之が未來の夫たる人、皆なこれ玉盗人かと思へば、あはれ不倶戴天の仇敵たるの感あり、萬腔の熱腸を傾けて之を呪はんとを欲す。僅か一年に充たざる歳月、共に學びしのみなりとて、なほ別るゝことの悲くまた苦きこと、此の如く甚しきものならば、何十年の星霜、共に語り共に住み共にゆるせし最愛の妻を失ひし人の心は、如何に寂くまたえ堪へぬ心地せらるゝものならんと、この時われ志み〳〵と想ひ起しぬ。これまた涙のうちに示し給ふ神の御敎なるべし。

○

佐々木信綱

われは嘉志子の君を志らずといへど、かつて小公子をよみて、その譯文のなだらかなるに、くりかへしてよみたりき。さるを君今や世にいまさず。挽歌三首を詠して其靈にそなふ。

いかでかく若まつがえはかれにけむ
　時ならずして千代にあえずして

君はさはやすけきゆめやむすぶらん
　ちらぬ花さくあまつそのふに

春なれどゆきちりぼひてかぜ寒し
　大ぞらもまた君をしむらん

案山子洒舎諸社中詠草　（第二）

池袋清風大人斧正評點

大阪第一社

兼題

春月　永井鶴子

都人狩くらしたる深山路（山のべ）のさくらよにほふ春の夜の月

評　此處深山路の必要なきのみか都人が深山まで櫻狩に行くべくもあらず

柳　大島榮子

、春風に垣ねの柳なびくらん賤がわらやの見えつかくれつ（する）

春雨のなごりかすめるやなぎ原露ふきみだし夕風ぞふく（こぼるゝ露の音ぞきこゆる）

評　上句はいさも靜かなる景にて風なごありさうにも思はれず下句は合はぬやうなりまして吹の詞ふたつあるをや

樫内節子

白露の玉をぬきつゝ糸柳風にみだれぬけさにもあるかな（けふの長閑さ）

評　山口利雄翁の美麗なる歌には遙に及ばず

春雨の露の白玉ぬきながら朝日になびく青柳の糸

を吟ずれば實玉連珠燦爛としてまばゆし

今村幸子

、おぼろ夜の月もかゝりてかも川の柳の糸にはる風ぞふく

垣田康

谷川の柳のもとの丸木ばし牛ひく人のわたりゆく見ゆ

評　丸木橋を牛の渡るは危かるべし點者の詠なりしが

くれ渡る野川のきしの柳かげ牛おふ子らが歸りゆく見ゆ

永井鶴子

淺みどり（ほのかにも）軒端のやなぎ露見え（ちり）てはる雨はれし夕ぐれの空

評　淺みさり軒端さいへるつゞきをきかず

春雨　大島榮子

、、窓の外におつる椿のおとはしてはる雨さびし淺茅生の宿

評　春雨には趣向新珍にして亦寂寞の禪味あり

樫内節子

、ふりはへ（おもふどち）て若菜摘んと思ひしに（ちぎりてし）野の面（べは）かすみて春雨ぞふる

評　田の面などいへど野の面とは聞かれず

大島榮子

、、ふたつみつ小田の蛙のなきそめて草のいほりに春雨ぞふる

評　何でもなく且耳なれしやうなれど實景を見るの感あり此處ふたつみつの語よく適當せし也

戰後教育の弊處（一）

鷗村

假令ひ教育論壇の一方よりして、戰後教育界の落莫既に今日に極まるとの嘆聲を耳にすることありと雖も、其今日は之を戰前に比して、一層長足雄飛の進歩をなすべきの、好境遇に置かれつゝあるは事實なりとす。此進歩や實に喜ぶべし。然るに之に伴隨して、業に已に吾人の憂へとなしたる幾多教育界の弊事が、時代の狀況と、社會の形勢と、國民固有の僻質との助長を受けて、彌々益々增大せんとし、而も吾人の認めて弊處となすものも、他に在りては却てこれが增長を奬勵せんとするものあり、又驚喜の情感を以て歡迎せられつゝあるを見て、更に痛嘆の過む能はざるなり。

其目して戰後教育界の弊處となすべきもの、何ぞや。尤も大なるもの之に二あり。一は即ち文相が所謂衰世逆境の人を模範とする慷慨悲壯的教育の弊にして、他は即ち偏狹なる國家教育説の弊なりとす。以下この二弊處に就きて、當時の世潮の流勢を觀察せん。

慷慨悲壯的教育

西園寺文部大臣、高等師範學校に國民の氣象の宜しく活潑爽快なるべく、慷慨悲壯なるべからず、宜しく正大有爲なるべし、偏曲奇僻なるべからざるをいひ、衰世逆境の人を模範として、今日の青年子弟に憑式せしめんとするの不可なるを説き、教育の大道の以て經由すべき其眞諦を諭す。由來文相、大に教育の根理に通じ、其識見遙に、滔々たる凡眼者流自ら任ずるに教育家を以てするものゝ上にあるを見る。斯くいへばとて、吾人は敢て侯が當路の顯職に阿るものに非ず、たゞ其主義とする處、見て以て眞理と認むるが故なるのみ。然るに平素眞理を探求すといひ、正義大道を愛慕すと稱し、社會の爲めに公平なる耳目を以て任ずるの新聞雜誌にして、彼非慷慨悲壯説の一度び世間に紹介せらるゝや、多くの者は忽ち固陋なる偏見に驅られて、是が非難の聲を揚ぐ。蓋し其中自から、當時日淸戰爭後、社會の運行の墓々しからぬに對する不平不滿を爰に洩すとあるなり。或は之を嘗て福澤翁の唱へ

たる、楠公の自刃は、權助の首縊に同じとしたる奇説の再燃なりと酷評したる、東京朝日新聞の如きあり。或は又平素謹嚴剛直の筆法を以て重んぜらるゝ日本新聞の如き、之を暴駁し、剩へ文相其人の持論素行をも推斷罵詈して、呶々一番し、所謂慷慨悲壯して、正大有爲を缺くものあり。或は又少しく手和らかき辯駁を試むるものあるなど、議論囂然たり。而て硬軟幾多の非難の聲の調和齊諧する處を聞けば、詮ずるに概ね今日の社會は逆境に立てり、此時に當りて何ぞ衰世逆境の人を模範として、青年子弟を憑式せしむることをやめんや、四面皆な豺狼を以て繞圍するの日に於て、國民豈に慷慨悲壯を廢すべけんやといふに在り。誰か慷慨悲壯を以て悉く廢すべきものとなさんや。誰か衰世逆境に處したる偉人奇傑を以て、悉く欽慕憑式すべからずとせんや。痴愚も亦其不可なるを知る。况んや文相に於てをや。たゞ之を不可なりといふもの、世の子弟を敎育するに於て、據るべきの第一義の爰に在らざるが故のみ。吾人もまた斷じて子弟の敎育に於て慷慨悲壯を不可とし、衰世逆境の人物を模範とし、之に憑式せしむべからざるを信ず。この不可なるもの、實に是れ、既往の敎育に於ける最大誤謬なりしに、今後の社會に在りてはなほ益々陷り易きの弊害となり、而も現今の狀勢は子弟をして、この弊處に於て敎育を受けしむることに滿足しつゝあるなり。

世に正變の二義あり、而して正に處することありて後、始めてよく變に處することあり。彼衰世逆境の偉人傑士なるものも、もし彼に就きて熟ら其時處位に處して、大に宜しきを得たる所以の跡を顧りみんには、誰か先づよく正に處らざりけん。彼等の事業は、即ち之を以て、其變を治めんとしたるものに非ずや。然るに今日多數の敎育者のなすが如くに、單に彼等が變に處したる事實のみを見て、少年子弟の憑式すべきものとなさんか、思想甚だ單純淺薄なる彼等は、唯其事實の表面に、万事の終れるを見て、人は如何に彼此の變に處したるかを知ることあるべし。然れども是れ畢竟知るといふに止まらんのみ。先づ正に處するの道を學ばざるに、如何でかよく變に處するのことをなし得んや。素より變に處するの道又敎ふべきの事あり。然れども先づ敎ふべきは、正に居るの道なり。既に之を知らば、如何ぞよく變に居ることをなさゞらんや。今日の修身書の模範人物として擧ぐる處のものは、比々皆、衰世

逆境の人物ならざるなく、而して少年子弟に教ふるに徒らに變に處するとのみを以てし、又漫りに彼等を激熱せしめんとを勉むるに似たり。夫れ如斯きを以て、如何で教育の道、其宜しきを得たりといふべけんや。

人の志す處は、天下の廣居に處り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ひ、正大有爲にして、内自ら熱血あり、活火あり、以て活潑爽快ならん事あり。如斯にして後、始めて天下に其重きを致す。正大有爲は是れ、少年子弟道を學ぶものゝ志しとすべき處なり。然るに何ぞ之を他にして、漫りに彼等をして、慷慨悲壯ならしむべけんや。慷慨悲壯や、素より世に處し、時に居て、人の有せざるべからざるの精神にして、而も正大有爲の人のみ、始めて眞に慷慨悲壯す。其慷慨悲壯は天下を震駭するの力あり。彼の其内虚しくして、風の吹くにも、雨の降るにも、腕を扼し、齒を食ひ縛り、眦を決するが如き徒の、慷慨悲壯は到底半文錢をも價ひせず。之を古今の史乘に照して、彼のたゞに慷慨悲憤する輩の、常に天下の事業をなすと能はず。これに成就したるものは、多くの正大有爲なる人士の、心頭に湧沸せる活火なり熱血なるとを見ずや。近くは維新の功業、決して高山彦九郎一流の人間に成らずして、南洲海舟等の力に成れると、之れ即ち其好證に非ずや。彼水戸烈公の如きすら、晩年秘に松平慶永に諭すに、慷慨悲壯するのみにては、畢竟何等をも成就し難きの悟りを以てしたりといはずや。夫れ今日我國の時勢たる、素より吾人を要して慷慨悲壯ならしむるの事甚だ多しと雖も、當に之をなして、豈に國家の隆盛安寧を計るとを得んや。

天下の大事要する處は、正大有爲の精神に在り。而も彼慷慨悲壯すべきもの、亦是れ此精神の缺乏せるによりて來りたるに非らずして何ぞ。然るに此時に當りて、たゞ慷慨悲壯なるべきを知りて、實は正大有爲ならざるべからざるを知らざるは、抑もまた誤れりといふべし。而も此時に當りこの誤れるを以て、青年子弟が教育の上に加へ、漫に敵愾の氣を挑撥せんとするものあり。彼等をしてよく其効を奏せしめなば、國民の氣質を破り、天下の事を誤るもの、これより甚しきは非し。然るに此畏懼謹戒すべき謬誤の却て今日の教育界に喜ばるとは、豈に長大歎息に堪ふべけんや。戰後教育の弊其一は爰に存す、天下の士憂ずして可ならんや。

○小學先生衣食足る乎

小學教員待遇に關しては、年功加俸案の議會を通過するありしよりして、世論の注意も一層促がされぬ。嗚呼滔々たる天下幾万の小學先生、君が職責や、未來の國家を形成するに在るの重きなり。其重きこそは、教育思想の發達進歩と共に層一層を加へらる。世は筆に於てまた口に於ては、君が職責の重きを尊敬するが如くに見えざるに非ず。然れども事實に於て、君は多くとも十圓の給料の爲めに、膝を無學の小吏にさへ屈せざるを得ざるなり。君が口は箝され、手は掣せられ、足は繫がれ、之に忍べばこそ妻子は僅に餓みを免る。君が第一の問題は、頑兒の爲めに鞭を執り、咿唔の聲に聲するとの成績を思ふが上に非らずして、正に死活の問題たらん。嗚呼其責や重きに比して、衣食の道に窮乏する、抑もまた君の如きものありや。君が營々として獲る歳月に幾許ぞ。最近文部省年報によりて之を見るに、最多額の千葉縣にて、平均十二圓九十錢六厘なりといひ、最少額なるは普通教育の尤も發達せる石川縣の平均七圓四十一錢七厘なりといふ。之を他職業の所得に比較して如何、左表を見ずや、これ統計年鑑の報ずる所。

職業	日給	月額	職業	日給	月額
洋服仕立職	円、四九二	一四、六七円	大工職	円、三一六	九、四八円
烟草刻職	、二六五	七、九五	木挽職	、三〇九	九、二七
左官職	、三一六	九、四八	疊刺職	、三〇四	九、一二
建具職	、三〇四	九、一二	染物職	、二五三	七、五三
指物職	、三〇〇	九、〇〇	鍛冶職	、一八〇	五、四〇
油絞職	、二五五	七、六五	綿打職	、二三九	七、一七

（九州教育雜誌による）

東京の車夫は健脚者にして、一ヶ月十五圓以上の收入なきはなく、普通勞働者と雖も出精すれば十圓の收入、一ヶ月を支ふべきものあり。之によりて見るに、小學先生衣食の道や、實に憐むべきものに非ずや。實にや彼フイッチがいへりし如くに、小學教員の職や、事業として、尤も高尙尊榮なる代りに、之を衣食の道とし、商賣としては、尤も憐むべく、尤も痛むべくして、車夫勞働者だにも如かざるなり。蓋し小學先生の職や畢竟衣食を獲んが爲めの道に非ずして、自ら信じ、自ら守る所あり、彼の天下を以て任ずるもの丶事業なり。之によりて僅に活路を求めんとするが如き卑屈の輩に至りては、三圓の給料もなほ貴しとする處、否小學教員の職や、主義なき人物を容るゝを能はず、さる人間は須らく去りて、他の活路を求めよ。もし能はずして飢餓其身には及ばんも、こは至要至重なる教育界の爲めに憐む能はざるなり。

近刊教育時論其「教育振興私議」に於て教員の職務を論じていへらく。

抑も教員の職務は神聖なる職務なり、此職務に從事するもの、固より世間的待遇の厚薄を以て、心を煩はすべからず。然らざる悟性一偏の人は、神聖なる職務を瀆すべからず、報償の如何を常に念頭に置くが如き輩は、始めより教員を志望すべからず。

然れども小學教員もまた人間なり、孔子の所謂匏瓜に非ず、豈に繫りて食せざるを得んや、

國家は其興亡に關する教育の大任を以て、教員を負はしめたる以上は、國家が與ふべき性質の待遇を以て尤も厚く之を待遇せざるべからず、是れ即ち國家の職務なり。

と、而して小學教員待遇法及無形的と有形的との二あるが中に其有形的待遇を記して、

文部省第二十二年報によれば、明治二十七年、小學校教育に從事せる教員は、其正准を合して六万三千〇三十五人其年俸金總額は、五百九十九万五千七百九十四圓なり。故に教員所得の平均額は、九十五圓十一錢、之を月俸にして平均七圓九十二錢五厘、日給にして僅に二十六錢强なり。

といへり。嗚呼一日に獲る所僅に二十六錢、小學先生衣食足る乎。然るに俸ふるものあり、某地方の小學教員中には僅に、五圓の月給にて可なりの生計を營みなほ月々幾分つゝの貯金を殘し行くものありとか。さても可憐。又聞く年功加俸、退隱料給與等の寬典を利として、濫りに戸位を充たし、或は種々の魂膽を catch へて、有名無實の俸給額を帳簿に記載せしむるものありと。さらば彼等は實に教育界の賊なり。然りと雖も吾人は斯如きを聞きて、敢て驚異奇怪の事となさず。今日の教育界が如何なる卑劣教育者によりて蹂躙されつゝあるかに觀察し到らば、必ずやこの怪事の素より當然の事にして、なきこそ却て不思議なれの感を發せん。

○教育社會の不振

教育報知記者嘆聲を洩して曰く、

　教育社會の落莫今日に極まる、誠火ある者、誰か悵然として感愴なきを得んや。と。教育時論もまた同様の嘆聲をなす、曰く、

　遼東半島還附の役、全國の人心、何となく沈淪したるが如く全國の教育社會は、猾口訓令發布の後、次第に氣勢を失ひて、不振の狀況を呈し、殊に近頃鋭進の氣力に富みたりし教育會及び教育家も、何時しか其本性を失ひて議論事業、共に一も觀るべきものなし。教育社會の沈淪茲に至りて極まれりといふべし。昨日盛運の好況を來したりし教育界、今や既に此衰兆に逢へりや。世はまだ春過ぎて程もあらせず。新樹、山頭に緣り淺く、夏草の繁みなほ深からぬに、獨り教育社會に落莫たる秋風吹き荒まんずるや。否而も沈淪茲に極まるといふ、抑も何等の狀態ぞ。不定不變の進取を以て任ずべき教育界にして、かくも輕浮易變なりとは、何等無上の醜事ぞや。而も此衰運が、行政上に容喙するを制したる、當路一片の些々たる訓示に基因といふに至りては、愍むべし、我教育界の定見定動なきや。學政機關の全備せんと尤も望むべきの至りなり。然りと雖も、豈に何ぞ之なきを以て、世の教育者なりともいはるゝものゝ毫も失望すべきの事ならんや。君等の希ふ彼の學政機關なるもの整ずればこれ單に教育施設上の一便宜を造らんとするに過ぎざるのみ。而して君等先づ務むべきは、これに非ずして、彼教育の大義に在り。然るに、今は傳へらるゝが如くにして、君等果して、何の顏を以て世の子弟を教へんとするや。教育者、教育社會既に鋭進の氣力を失つて、沮喪落心すといふか。教育の事たる後代を待つの事業なり、百年二百年の後を期して、始めて稍く其効果を見るを志ざしとすべきの事業なり。目前の成功を見んとに煞立ては、必ずや失望なき能はず。自愛せよ教育家、君等もし其責任の如何に大にして、期する處如何に遠大なるかを知らば、乞ふ昨日の鋭氣、今日忽ち消耗するといふが如き、聾聵痛嘆すべき報導を世に公けにせらるゝことを深く耻ぢさせよ。然るに翻つて吾人はまた教育社會の落莫沈淪を叫ぶは、之を叫ぶもの、過ぎたるの希望を抱きて、その餓に滿足を得ざるが爲に然るに非らざるかを疑ふ。果て然らば沒りに落莫沈淪を呼ぶの罪は實に彼等に在り。アゝ落莫か否か、沈淪か、否か吾人は未だ深く推究せざるが故に直に之を斷する能はずたゞ吾人は勸告す、眠れる者は起きよ、起きたる者は進め。教育の大道坦然として前に橫たはれり。此道に當りて斷えず進歩すべきものにして、何すれぞ睡眠淹留すべけんや。

○三名士の教育談

大隈、井上の兩伯鄕黨の子弟に教育を談じ、福澤翁は之を名古屋に說く。大隈伯曰く、

　國の盛衰貧富は普通教育の振否如何に由る。故に兒童就學の統計により、其國の富强を卜知するを得。

井上伯曰く、

　智育德行は必ず並行せざる可らず。教師は種々の便宜を利用して、兒童の父兄と會談して學校と家庭とを最も密着せしめ、また小學校にては教師は授業をなすと共に兒童をして樹栽等の實業を執らしめ、自ら校資產を作るをよしとす。

福澤翁の說最も妙味あり。咀嚼すると多くして益々之を知る。

　教育と云ふことは學問さへすれば、手品師の種の樣に何んでも出來ると思ふのは、大間違ひで學者でも、上げも下げも、ならぬ馬鹿野耶がある。然し劍術の形と、碁將棊の定石だけのと、即ち一通りのことだけは、教育もやらしてをかればならぬ。豐太閤の如き假名ばかりで、本字は五六字しか知らなかツたと云ふが、アンな人は別物として、大體の教育一通りの方法だけは知らしておかれば途方もない大損をする。恥を晒して、ツウして人に笑はれるやうな詰らぬことが出來る。今の教育は昔の教育と違つて、世の中に學問の流行する時節だから、昔の通り無學でゐては世間が許さない。教育は昔の大小のやうで、大小は人を斬るために差すものであつたけれども、ツヒぞ人を斬つたことはない。ツウすると無用の長物かと云ふに、其頭は決して無用でなかツた、アレを差してゐなければ人に斬られると云ふことがあつた、夫れで萬一を防ぐために差してゐたものである。夫れ故侍士の間には、大小なくして丸腰になツてゐては、人から馬鹿にされたものだ。今日教育の流行する時節に、昔のやうな學問をなして

山高きが故に尊からずなど、云ッてゐては、大小なしに丸腰でゐるやうなものなり。夫れで役に立つ所を云へば、劒術の如く、定石の如く、何でも一通りの教育はさせればならない、最も大層な學者になれとは勸めない。夫れは人々の天性であるから、出來るものは出來るが、出來ないものは假令鞭韃を加へても出來ない。故に總て子弟を大學者にするが好いとは一般に勸めず。只だ一通り學問をするが好いと申すのだ。

時　文

○犯罪救治論　　田中太郎著　　教文館發行

社會問題の研究解釋すべき事多きが中に、犯罪救治の問題の如きは、其甚だ重要切實なるものなり。人身病あれば之が治癒に術策を盡くす、社會の病ひもまた之が救治に策を盡し術を講ぜずして可ならんや。犯罪者は即ち社會の大傳染病根なり、之が救治の策に勉めずして可ならんや。社會の病源を治癒せんとは、則ち社會の改良進歩する所以なり。田中太郎君爰に見る所あり、この「犯罪救治論」の著あり、論ずる所、犯罪の原因、遺傳と罪、境遇と罪、家庭と罪、教育と罪、交友と罪、飲酒と罪、貧富と罪、犯罪の救治、矯風事業、窮民救助と犯罪救治、感化教育と犯罪救治、結論附監獄改良等にして、皆な社會の改良と思ふの人の一讀すべきものにして、吾人は特に婦女子諸君が此の如き書を研究して、社會問題の急務の家庭に於て解釋し得らるゝ丈は、之を解釋するとに勉められんとを望むものなり。

○成業立身錄　　山縣悌三郎著　　少年園出版

少年園主山縣悌三郎氏著す處「成業立身錄」は主として實業社會に入らんとする少年の參考となるべき、成業立身の要訣を擧ぐるもの、說述する處「少年社會に出でゝ職業に就くの順序」「各種の職業并に成業者の立認」「就業者に關する要件」「成業立身の要訣并に處世法」あり、以て少年座右の好伴侶となすべし。

○親鸞眞傳　　村田勤著　　教文館發行

史的批評の四字を冠するが故に、必らずしも一々宗教觀によりての評論にあらずと辯ずるとを得べき乎。左れど、宗教的偉人の事は亦た宗教觀によつて評論するの外、史的批評はあらざるべし。此書、蓮如と親鸞との關係を論ずる所ろ、眞宗盛興の理因を說くに千斤の力ありと雖ども、其他三四の所云ゆる辨妄なるものは、たとひ著者の言へるが如しとするも尙ほ親鸞を輕重するに堪へざるが如し。但し一種鋭利の炯眼は何處にも輝めきて、容易に浮かと信用せざる覺悟、史的評家の特色を示して十分の見所あり。僅かに憾みとして表白す可きは、其の何如にも宗教的偉人物の心懷胸裏に同情を與ふるその冷薄なるらしき所にありとす。

○シルレル　　緒方維嶽著　　民友社版

流水緒方氏の處女作「シルレル」成る。世既に之に對するの公評あり。吾人はなほ熱讀の上、次號を待ちて、拙評を妄にするとあるべし。

○冷　熱　　紅葉山人著　　春陽堂版

これぞ紅葉山人が最得意の作と、稱出しの小說なり。繼いて之を見れば即ち、曩に讀賣新聞紙上に連載して、中途消息を絕ちたるもの。蓋しボッカチオが『十日物語』中、第八日目物語の飜案にして、紅葉が輕妙洒脫の筆鋒ますく銳利なり。憾むらくは一篇其冷の部とへ全からざるとなり、而も出版の事急にして完成の時を得ざりしやう斷れるは、紅葉が文壇に立つの自信を潰すものといふべし。冷熱原文飜譯、大鼻毛、湯の花、心の心等附錄せるもの亦紅葉才筆の餘滴可讀。

○水の聲　　江見水蔭作　　春陽堂版

其汪々洋々たるを聞かずと雖も、涓々小石を洗つて、細鱗潑剌たるを見るもの、これ水蔭が『水の聲』なり。小品數十種、文字巧美、詩趣のまた掬すべきものなきに非ず。

〇ひとり娘　　柳浪子作　　春陽堂版

近頃理想派作者の中の雄なるものなど評贊せらるゝ柳浪子が作としての『ひとり娘』とは、作者自身に於ても決して得意の作に非らざるべし。可憐の孤女、俊邁の才子、痴鈍の息子、惡奸惡婦等小說中の人物に活動なく情熱缺く。

〇異郷の友垣　　吉田健作遺稿　　春陽堂版

末松青萍男が亡友吉田健作氏の遺稿を編輯せるもの、作は末松吉田兩氏等が外遊勉學中の出來事を材料とせり。蓋し斷篇に止まり、また擧げていふべき程の文字結構に非ず。

〇逢合傘　　松華庵、漣山人著　　春陽堂版

松華庵主人作『陽炎』漣山人作『糸遊』の合卷なり。『陽炎』のお島女意中の人を思ふに苦悶を秘する處可憐なり。お島の計策はあまり意外に過ぎ、武平の頑物に動き少なく、信三郎に氣骨なし。漣山人の少年は其得意の筆法現はれたり。

〇白百合　　第一號

英派の『早稻田文學』、獨乙派の『めざまし草』の向ふを張りて佛派文學輸入者として、夫自身佛國々粹のエンブレムたる『白百合』を名として生れたり。之に筆を執るもの劇通の長田秋濤、蕾伯の久米、黒田兩氏あり。第一號飽き足らぬ節多けれども、至囑す花を開くをいよ〳〵盛んに香を送るをます〳〵芳ばしからんことを

片々

〇工女謠ふ　相生足利機業場の工女、梭を取り、杼を繰りつゝ歌ふをきけば、

嫌だ〳〵よ機織止めて、甲斐絹織屋のお神さん。
お鉢引き寄せ、割飯眺め、米はないかと眼に涙。
竹になりたや、桐生の竹に、糯子や緞子の綾竹に。

と。アヽこれ彼等が境遇の眞狀を歌ふの好敍情詩ならずや。

〇工女の貯蓄心、紡績會社の工女中尤も貯蓄心に富むものは廣島伊勢等出生の者に多しとすといふ。

〇桐生足利　には總計二万七千八百八十人の工女あり、其多くは北陸より出づ。三年住込は五圓、五年住込は十圓、十二圓、七年住込は二十圓、之れ彼等が額の汗の結ぶ果なり。

〇信州諏訪町　及び同郡手野村製糸場大小凡そ二百軒、之に使用する工女二万七千人、多く越後、美濃、尾張、三河より出づ。

〇名古屋高等女學校の位置　今回新設の名古屋高等女學校は同地淫猥の盛なる遊廓社會の中間に設立せらるゝよしにて、『新愛知』新聞は誰か此の如き土地に女學校を設立して、以て女子教育の完成を期するものぞ。吾人は敢て當路者の一顧を煩はさゞるを得ずと痛論せり。

〇都會の婦女子　は多く藝娼妓的の濁れる涙を持ち、田舍の婦女子は比較的澄める涙を持てりとは大坂毎日の秋亭主人。

〇萬朝報曰く　小學校にて女子に躰操をなさしむるの結果頗ふる月事の期を早くす。健康を害し風教を亂る一にして足らず。我國固有の女子教育あり、何ぞ之に由て健兒を生ましめざると。女子教育てふ問題の盛に世聽を惹くの機運に迎ひしと共に樣々の議論も見ゆるに至れり。

〇蠻土の女勇士曩きに伊太利の遠征軍に打勝ちて、雄名を天下に轟かせたる亞弗利加アビシニア國王メネレクの皇后タイトウは當代稀有の女傑にして、國家重大の政治には常に干與し、屢親ら勅諭布令の起草をなし、平素酒を好み、勇武の氣象に富み、此間の伊太利軍との大戰にも自ら軍を率ゐて、戰場に馳せ向はんとしたる程ありとぞ。

〇櫻痴居士の阿古屋琴責論　に云く文明の極致は音樂なり、此の大理想を當いて數百年の昔しに方今の開化哲理を戯曲に寫眞せしものは即ち阿古屋琴責の段なりと。

〇護教記者　當世の結婚を愛を賣るの腐賈と罵り、獨身者輩出せずんば、社會の純潔は得て保つべからざるなりと叫ぶ。

〇人口　最近取調べ我國人口男二千九十万、女二千四十八万。

〇高等女子師範學校　一年の經費要する處三万七千二百九十七圓七十一錢八厘。

〇海外に於ける我醜業婦　國民新聞通信者の「還羅紀行」によるに、海外出稼醜業婦の處在、人數及び所得は實に左の如しとぞ。

地名	人數	一人一月の收得平均	合計
香港	百名	百圓	一万圓
新嘉坡	三百名	百二十圓	三万六千圓
ヒーオン	二百名	百二十圓	二万四千圓
濠太利	二百名	四百圓	八万圓
東京（トンキン）	八十名	六千圓	四千八百圓
サイゴン	百名	六十圓	六千圓
印度全國	二百名	二百圓	四万圓
暹羅	四十名	百二十圓	四千八百圓
人數總數	千二百二十名	月收總計	廿万〇五千六万圓

なほ此他ボルチチ、シヤヴア、廣東等にも出稼せり。醜業婦の出生地は長崎天草近傍最も多く、之に次ぐは山口廣島なりと云ふ。

女子の情育……………………太陽（第九號）
女子の品格と精神○小學校の女子教育○近時の女子教育論○女子教育の氣運…………教育時論（第三百九十七、八、九及び四百號）
女子職業（看護婦○電話交換手）……………報知新聞（連日掲載）
大隈伯女子教育意見……………………讀賣新聞（五月三日）
婦人の勳功……………………日本（五月四日）
機業場の側面（工女）天涯茫々生……毎日新聞（五月七、八、九、十二、十三日）
福翁百話（一夫一婦偕老同穴○配偶の撰擇○家族團欒○苦樂の交易○夫婦の間敬意なかるべからず○國光一點の曇り）福澤諭吉……時事新報（五月中掲載）
觀察一東（家庭、幼稚園、保姆、母、現今の母、家庭の育兒、家庭の風儀等）森村弘毅……………京都府教育雜誌（第四十七、八號）
當世の婚姻、寧ろ孤棲獨身なれ……………護教（三百五十二號）
女詩人（武田豁堂）……………岡山雜誌（第二號）
婦女の職業……………………報知新聞（五月二十一日）
令孃氣質……………………讀賣新聞（五月十七日後）
女性に對する注文○女子の職業○海外に於ける我醜業婦○女子教育……………早稻田文學（第十號）
隨思漫餘（男女の差別、女子の獨居、女子の玩物、女子の德）久津見蕨村……………教育時論（第四百號）
婦人と宣教（大佐ライト）……………閨聲（第十四號）

時報

◉寶冠章

婦人にして勳功あるものを錄するが爲めに是迄寶冠章の制定ありしも、そは勳五等迄に留まりて、而も婦人の叙勳は王妃殿下若くは特別高貴の女性に限られ、平民の女子にして實際國事に勳功ある場合にもこれに勳章を授くること能はざりしが、今般日清戰爭中、婦人の兵士看護の事業に從事して、功勳顯著なるもの多く、論功行賞獨り男子にのみ限らるべきに非らざれば、四月十三日發布勅令第百三十六號は寶冠章に三等を加へて、勳八等に至らしめ、而して不日婦女叙勳の發表あるべしと聞く。さればこれよりは一个平民の女子の其美勳錄せられて胸間燦然たる榮譽の勳章を懸くるもの多きを見るに至らんかな。

◉皇女御降誕

五月十一日園權典侍によりて皇女御降誕あらせられ。同十七日御命名式あり、御名聰子と命ぜられ、泰宮と稱し奉る。

◉小松若宮御息所御離緣

鏡面破れ、情緣全からず、竹園なほこの不幸の事なり。小松若宮依仁親王妃八重子殿下には、病氣の爲、情願に任せ、去四月三十日御離緣あらせられたりとぞ。妃殿下は土佐山內豐景侯の叔母、去廿五年七月六日御入輿ありし方にて、聞く處によれば、御離緣後直に剃髮の上舊領土佐に赴かれしとぞ。

◉新臺灣女界

◉臺北附近女子の風俗　國民新聞通信員白津生の臺北通信によるに、其地婦人の風俗を記して左の如くいへり。

●有夫の婦は猥りに外出せず、又輕々しく他人に接見せざるの慣習に候されど此等の總ては只僅に上流社會に行はれ居るのみ。中流以下は甚だ不規則なるものに候。

●婚姻は當事者双方の間に仲人入りて、いよ〳〵相談纏まれば。婿の方より五十金乃至二百金を結納として新婦の家に贈り倘ほ衣裳、粧飾品等の一切は委皆婿

の手にて調へ、之を新婦に贈るなり。而して新婦は入家の際一品たりとも、父家の物を携帶せず。故に一度婚成れば、如何なる塲合に於ても決して婿の方より離緣する樣の事はあらず。若し婦たるものが强ひて、離婚を求め、或は情夫と駈落する樣の事あれば、新婦の父兄は成婚の當時接手したる丈の金員物品を辨償するの責務を帶ぶる。斯くの如く内地とは正反對の手續によりて入家せる新婦たる者が裡面に於ける權力の强大なる實に驚くべきもの有之候。尙ほ當地方は早婚の弊あり、概れ男は十七八歲、女は十四五歲を以て結婚時となせり。

◎濁流内地より流入す　或は臺灣に公娼を許可せんとするの議あり、或は既に一種新發明の中娼なるものを置きたりとの報あり。また密業婦の流入するありと、今此等痛嘆に堪へざるの通信一二種を左に掲ぐ。

●中娼(臺灣の新發明)　目下臺灣に入込み居る商人の數少からざるが其中に一御用商人あり何思ひけん大枚二万五千圓にて手廣き地面を臺北城内に買求めしが間もなく之れを同地出張の銀行に質入れをなせり此御用商人は資本の手不足なるにも拘はらず何故斯る手廣き地面を買求めたるやといふに元群馬縣警部長にて同縣下に廢娼問題の喧かりし頃右問題の爲め同縣より排斥せられて岐阜縣に轉任し玆に又た土木工事にて失策し夫れより流れ流れて臺灣に到れる○○氏と云へるは件の御用商人に向ひ臺灣には公娼を許可せらるゝ筈なれば逸早く之れが計畫を爲さば一攫千金何んの雜作もなかるべしとの勸告に偖こそ右の如く地面を買入るゝに至りたる由なれども其後公娼許可問題に付種々の議論ありて終に中娼といふものを默許するとになれりとのことなるが檢査丈けは官にて爲し別に公然許可とては與へず私娼にも非らず公娼にも非らざるより終に中娼とは名けしなりと。(每日新聞)

●前出の國民新聞通信中にも左の如くいへり。

過日來極めて賤しき日本婦人ボツ〳〵入り込みて、城内の飲屋に散在蟄居いたし居り候。之を垣間見んとて、日人及び土人の群がり集ふを、宛がら蟻の甘きに就くが如し、無理ならぬ儀とは申せ不體裁の限りに候。

●廿歲未滿の女四十三名　四月二十三日長崎を出帆して基隆に向ひたる瀛船久保丸に便乘したる長崎よりの乘客者百十九名の中七十名は女にして其中四十三名は二十歲未滿の者なりしと、萬朝報は報ず。これ等豈に濁流の本土より彼土に流入するものに非ざるなきを得んや。

◎二高等女學校新設　長野高等女學校は四月中開校し、名古屋高等女學校は本月末開校の運びとなれり。後者には前女子成立學舍敎頭棚橋絢子校長として赴任ありたるよし。

◎二佛敎婦人會創立　金澤に佛敎婦人會起り、名古屋にもまた本願寺分院内の倘總會中に更に婦人會なるものを設く。

◎慈善音樂會　大日本婦人敎育會にては中以下の女子の爲めに設立せられたる附屬女學校及び無月謝小學校維持擴張の爲、去る九日上野音樂學校講堂に於て慈善音樂會を開きたり。

◎明治女學校新築費　募集慈善市は津田梅子、瓜年志げ子、小鹿島筆子、矢島楫子、横井玉子、加藤とし子、雜賀あさ子、木村かめ子諸氏の發起により、大山侯爵夫人、大隈伯爵夫人、川上子爵夫人及原六郞夫人之が贊成員となり、愈〻來る六月十九、二十日の兩日を期し芝紅葉館内に開かるゝ筈にて入塲券は特別五十錢並二十錢の由。

◎慈善市寄附金　近衞公爵毛利公爵蜂須賀侯爵鍋島侯爵よりは右慈善市に向け各金拾圓を、經濟雜誌社よりは金卅圓を寄附せりとか。なほ又大山侯令孃信子逝去の爲　皇后陛下御下賜の吊祭料金十五圓は其儘寄附となりたる由。

◎老女の篤志　宮城縣士族氏家直子は本年六十二歲の高齡なるが今回日淸戰爭の結果として軍備擴張の事を聞き女ながらも何か獻品せんと苦心せし末軍艦にては婦人の頭髮を以て綯ひたる毛繩を用ふるとの事を聞き出し昨年より滿一ヶ年苦心し女子一万人の頭髮を集め長さ百尺の繩を作り出し勝間田同縣知事の手を經て此程海軍省へ獻納に及びたるに同省にては是迄軍艦に用ひ來りたる毛繩は製造に手數を役すより數月前之を廢止したるも其篤志忍耐力とを嘉し之を遊就館に出品して陳列せしめたるが其繩には白髮處々に交り居る由

◎善行表彰　夙に心を慈善事業に用ひたるを以て人に知られし福島縣岩代國耶麻郡喜多方村瓜生祐次郞養母瓜生いわ子は左の如く善行を表彰せられたり。

資性溫良貞淑勤儉を行ひ施與を務む明治戊辰の後會津地方の民窮し俗壞るを見て之を賑濟敎育し爲めに幼學校を建て即ち自ら東京に來り救貧の方法を講究し歸りて貧兒養育所を私宅に設け又救育所を福島町に設く既にして近郡有志の囑託により育兒會を創め又自ら福島瓜生會を開きて窮乏を賑はす等爲めに凍餓を免れたる者前後甚だ多し或は飴粕を以て煎餅麵包を創製して救貧の一助と爲し其他育兒慈善の事業に盡瘁すること三十餘年爲めに費す所尠なからず洵に公衆の利益を與し成蹟著明なりとす仍て明治十四年十二月七日勅定の藍綬襃章を賜ひ其善行を表彰す

◎御行啓　皇后陛下には本月十八日高等女子師範學校へ御行啓被遊、御參觀あらせられたり。

◎東京感化院女子部　澁谷御料地に在る同院は今回新に女子部を增設する事に定りたる由。

◎敎員檢定試驗受驗女子數　本年度尋常師範學校、尋常師範學校高等女學校敎員

檢定試驗受驗九百三十四人中女子四十五人なりき。而して試驗の結果今年は婦人の成績甚だ宜敷、殊に外國語の如きは檢定試驗開始以來始めての合格者を出したるよしにて、英語には宮川さし子長谷川きた子の二人、佛語には農學士菊地熊太郎氏令妹外一名都合二名合格せしさぞ。

◉佛教婦人淑德合　にては海外渡航賣淫婦取締法制定の件、及び姦通の事につき民法及び刑法中の數條改正の件を政府及議院に建白したりさぞ。

明治廿九年四月度全國各女學校卒業生一覽表（一）

○高等女子師範學校卒業生七十九人

師範學科十九人　△は隨意科外國語修了の者

△中西　てつ　△神通　せき　△關口しづこ　津和崎こう
△片山　くみ　澤　さも　△塚田　つぎ　丹羽ちやう
△中澤ゑづ尾　林　ゑやう　△小田切浦乃　美濃部　樂
糸山　伸　△種村　ゆき　味岡　はな　△倉元　いの
富樫　孝　三宅　すえ　岡本　學

附屬高等女學校補習科二十二人

田口　うた　宮崎　まさ　上京　さえ　山島　ゑげ
濱尾　ゑく　石川　まさ　成田　よつ　北條　さし
牧野　ゑづ　布施しゆん　今村　さら　齋藤ゆきの
堀越ひで子　成瀨かほる　猪俣みさを　林　ゑい
路　千代　石川　いさ　村井　よし　田口　のぶ
田中　みち　大矢　ゑさ

同本科三十八人

島川　たけ　大矢　鶴　大熊　ゑう　今村　照
池田　敏子　寺西　さら　津田　秋子　柴山　てる
松野　せん　五十子のぶえ　田中　いよ　草間　貞
野上　たか　川久保郁枝　神方　幸　武市　治
岩手　錦　菊地　さく　辻　信　井上　幹
渡邊　春　原田　てい　金田　智惠　風間　あか
田中　よし　山縣　のぶ　鴨脚　芳　赤松　かつ
中澤　愛子　渡邊　わか　原田　英榮　神保　英
黒田　文　小野　すみ　高田　秀　西尾　慶
粉谷　千代　石坂　留

○明治女學校卒業生十八人

高等科全科二人

岡　すみ　三浦　こう

英學撰科一人

見田　たれ

普通科十五人

兼田　たま　檜田こまさ　長岡　ゑい　中條　貞
飯田　さく　秦　ふゆ　田中　みち　中村　たつ
田中　みち　後藤　ゑん　津田　まり　岡本きくを
武田　ふみ　池田　つぎ　中　ちよ

○香蘭學校卒業生六人

長野　さめ　吉田　さく　渡邊さもゑ　長橋みよし
內藤　ひさ　柿澤　りつ

○鳥海女學校卒業生三人

津山　なつ　三浦　みつ　仙田　せん

○栃木縣高等女學校卒業生十九人

本科十四人

宇佐美ひで　猪瀨　ます　中根かをる　細川　らく
若林じやう　高木　させ　伊澤　ゑつ　大島　はつ
小林　せい　渡邊　もさ　太田　たま　古川　とつ
森　みち　內山　そう

裁縫專修科卒業生五人

久保　せつ　那須　ゑづ　加藤　せん　雨谷　つぎ　田山　つや

○東京女學館卒業生十七人

高等女學科全科十一人

板倉　滋香　尾崎　幸子　小林　展　山本　いさ
船越　清　莊　榮　桑田　菊　大倉　愛
森　豐　駒林　貞　篠原　照

（全科英語）二人

ミズ、ザェームス　ミス、スクワイヤ

撰科四人

三井　たを　遠藤　恒　ミス、シヤウドン　ミス、コンデル

布川靜淵　小此木信一郎二氏合著

俳諧史傳

和製美本　紙數三百二十頁　中本全一册
定價廿七錢　郵送稅四錢宛　許郵券代用

俳諧の道近頃大に興り、去年此書を公刊せし吾社の微志をして幸に酬いあらしむ、幸慶何ぞ及ばん。それ、俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七有言、尺幅の裡に無限の烟波渺々として際なし　俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて諧謔を擅にし　西山宗因となりて、奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痛なる正風俳諧の面目を搆成す。數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる想念を藻蕩せしめ、幽妙なる詩天地に逍遙す。其源流に溯り、其發達を叙し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を論じ、緇讀一番、炳焉として斯文學を腦底に活現せしむるとを期したるは、我が一俳諧史傳一なり。之を分てば、俳人個々の傳記となり。之を聯れば、整々一卷の史篇となす「逸事あり、名句あり。一誦の下、恍々乎として、月明かに花香しき境に遊ぶが如からしむ。若し夫れ一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、叙記精確剴切なるや否やは、世自ら公論あらむ。世の文士、一本を座右に備へざる可らず。

早稻田文學評に曰く、此書近年の好著、比較的に言へば、空前の好俳諧史傳なるべし、史眼の頗る潤大なる、叙事評論の其主題と相叶ふて優美、又閑雅、奇警、又遒勁なる、讀むものをして卷を措く能はざらしむるの致あり。

出版發賣元　東京下六番町六番地　**女學雜誌社**

A COMMUNICATION.

In common I doubt not with your women readers everywhere, I have turned month by month with increasing interest to the Women's Department (of the Japan Evangelist); and though its head, Mrs. Kashi Iwamoto, was known to me only through her English writings, I cannot but share the universal sorrow for her loss. Surely this universal feeling ought to find expression in some lasting monument; and the opportunity is before us in the need of funds to rebuild the Meiji Jo Gakko,—that school so dear to her heart, and so sadly connected with her last illness. It has been suggested that a special fund should be raised either to erect or to furnish—according to the amount collected—some one building of the renewed school. Perhaps some readers of the Evangelist may help to gather this fund, in memory of one who indeed needs no monument, for "her works do follow her."

Subscriptions may be sent to the Business Agents of the Japan Evangelist, 15-A, Tsukiji, Tokyo.

Anna C. Hartshorns.

(It it sufficient for us to say that we take pleasure in heartily endorsing the proposal of the above letter. It is a call that comes to every one that sympathizes, with any sincere effort to elevate the womanhood of Japan.—Editor of the Japan Evangelist).

檄告一則

妾はジャパン、エバンゼリスト雜誌の婦人欄を愛讀して月毎に興味同情を加へたり。是れ諡し該雜誌の婦人讀者諸君が何處に於ても同感を表せらるる所ならん。此欄の主筆巖本かし子夫人さは未だ一回の面識あらず、妾は只だ其の筆に成れる英文を通ふじて之を知るのみなりしが、今や夫人を失へる公衆一般の悲痛に對しては切に同感禁ずると能はざる也。去れば此の一般の悲痛の感情は何ものか永續すべき碑銘に顯現せざれば止まざるべきとさ思はるる折柄、恰かも好し、夫人が心胸さ此上なく親密にして而も其の最後の不幸さ痛ましくも相關係せる彼の明治女學校の再築資本の必要せらるる機會は、如今正に妾等が目前にあり。此に於てか注意する人のありて、亡き夫人を紀念せんが爲めに特別資本を募集し、其の集り高の多少に應じて再築校舍中の一室を建設し若くは裝飾せばやさ思ひ立ちぬ。諡し故巖本夫人の如きは、所云ゆる「遺業故人を追ふものにして」殊更に一の紀念碑を建つるの必要なきものながら、ジャパン、エバンゼリストの讀者中には、確かに此の發企に贊成して資本募集の事に助力せらるるならんさ信ず。

寄附金は、東京築地八五番八號ジャパン、エバンゼリスト事務掛に向け送附せられたし

アンナ、シー、ハーツホルン

（エバンゼリスト雜誌の編者附言す、吾等は最早多く言ふの必要なし只だ一言すれば足れり。右檄文の勸告を熱心に協贊するは吾等が愉快さする所、眞さにこれ眞實に日本の女德を高めんさする人士が皆な耳を傾けて謹聽する所の聲なりさ。）

文部大臣侯爵西園寺公望公題字
華族女學校長從三位細川潤次郎先生序
成瀨仁藏先生著

女子教育

日本帝國民が戰捷後の日本の國威を擴張し、國光を發揚し以て富强の國民として世界に橫行濶步せんに必ず先づ國民の素養を女子教育に起さゞる可らず、蓋し根本を家庭に有せざる教育は架空の教育なればなり、本書が戰捷の翌春を以て、諸君に見ゆる、實に偶然にあらざる也。本書は內國の女子教育に多年の經驗あるのみならず、數年間女子教育最盛の聞え高き北米合衆國に遊び、そが學理と實地とを探究見聞せられたる成瀨先生の筆に成りたるものなれば、架空の論陳腐の說にあらざるは細川先生の序文に云へるが如し。教育家、子女の父兄、及女學生諸君は勿論苟も邦家の前途を憂ふる者の必ず座右に欠く可らざる良書なり。

西洋綴菊版形三百頁
正價三拾錢郵稅六錢

（批評）

女學雜誌 著者成瀨仁藏氏は、大阪梅花女學校に、新潟女學校に、多年女子の教育に從事し、其の後米國に渡行し、諸大家に親炙して精かに女學を研究せられたる人也。こたび、題號の書を新刊し、歐米名家の論證を豐かに引用して、女學の現狀態に對する意見を發表せらる。第一章教育の方針、第二章智育、第三章德育、第四章體育、第五章實業教育に分ちて仔細に精緻の論を盡す此の類の書に於て未だ曾て有らざるの確實豐富なる論材を有す。就中體育の一章は、ことに斬新の實見多きを覺ゆ。美育の一章を欠きたるは少しく憾むべし。要するに女學漸く挽回するの今機に際して如此良著作を吾學界に得たるは祝すべきの限りなり。

教育時論 著者は曾て米國に遊びて彼國女子教育の景況を觀察し、又久しく女子教育に從事して研究實驗の功を積む。此の如き人によりて此の如き書を著はす以て其の書の杜撰に非ざるを知るべし。……博く海外教育大家の學說、及經歷談を引證し、立論精確、文章流暢、女教を裨益せんと、蓋し尠少ならざるべし。

時事新報 ……開卷第一に過古現在の女子教育の變遷を論じて、方針を定めんことを主張し、其方針として女子の高等教育は或る事を教へて或る場合に適せしむる人とするよりは人物の品格を作る所の普通教育により、凡ての場合凡ての境遇に於て其人物を發揮せしむべき基を作るにありとし、夫れより章を分ちて智育德育體育藝能に說き及ぼし實業教育の必要を說きて已む奇論妙策人を驚かすものに非ずと雖も內外古今の例に據り交ふるに實驗上の成見を以てし醇々然として說く所女子教育を輕んずるものをも首肯せしむ所あるべし。

早稻田文學 教育が只管實用的專門教育に傾きて、普通教育を排するの風あるに慨して此書は著されたり。……著者は今後日本の女子教育の方針を論じて曰く……本編は主として高等女子教育を論究したる者也。……の五章に分ち尙は幾多の項目を設けて巨細に論述せり。……著者は久しく米國にありて彼地の教育事業を觀察し、女子教育に於ける多年の經驗ある人なれは其の言鑿々として據る處あり。目下女子教育一頓挫の時世の教育の方針につきて迷へる者に取りての好津筏たるは疑ふべからず、文章も亦平明解し易し。

國民新聞 本書著者成瀨仁藏氏は學說に交ゆるに實驗を以てし、其の言ふ所鑿々肯綮に中れり。……章を逐ふて新說の迸出するを見る

大阪朝日新聞 ……女子の高等教育を論究せんとし其米國遊歷中の蘊する所と女子教育に從事すること十數年の實驗とを以て之を近時の國勢と女子教育の現狀とに照し裒然大冊を成し先づ女子教育の方針を論じて其論據を定め智育德育體育及び實驗教育の名目に就き說述して遺すなし其方針を論ずる曰く女子教育の時弊は實用教育に偏して普通教育を忽諸に附し去るにあり。曰く女子の天職を盡すに足るの資格即ち道德智識藝能及び體格を養ふべし。曰く國民たる義務を完ふするに足るの素を作るべし。換言すれば今後日本の女子高等教育の方針は第一女子を人として教育すること、第二女子を婦人として教育すること、第三女子を國民として教育すること。著者の女子教育に於る大旨觀るべし。夫れ我邦の女子教育を說くもの輓近以來一熱一冷、泛々として其根據の確立するあるを聞かず、徒らに風潮を逐ふて、其面目を飾るに近きの觀なくんばあらず。……著者の信ずる所を公にして、今の浮泛なる女子教育界の人士を警醒せんとする、洵に得難しとする也

大阪每日新聞 ……詳密に調査の結果を網羅し、且つ著者の所見を述ぶ……女子教育の世に出づるもの多くして疑問亦た少からず。蓋し著者の如き曾て專ら之を攻究し現に其局に當るもの其論皆な依據する處あるは固より言ふを待たざるなり。

發行所
東京市日本橋區通一丁目角 青木嵩山堂
大阪市東區心齋橋通博勞町角 青木嵩山堂

米國ミシガン大學校教授ドクトル、エチ、シ、アダムス君
日本同志社政法學校教頭ドクトル小野英二郎君 合著

國債及地方債 公債論 全一冊

菊版紙數五百五十頁○定價金六拾錢()上製本金八拾錢

今や我國は列國軍事競爭の間に介在し、國民の最も愼重に研究すへき問題は財政上の問題なり。本書は米國屈指の財政學者ドクトル、アダムス氏及ひ久しく氏の薫陶を受けしドクトル小野英二郎氏の手に成りし者なり。アダムス氏の**國債論**は廣く歐米各國に行はれ世巳に定評あり。今や之を邦文に譯するに當り氏は特に增補訂正する所少なからす。國債の沿革。國債より生する政治上、社會上、經濟の利害、軍事財政策、軍事財政の整理、國債の種類、國債募集償還の方法、等凡そ國債に關する諸問題は悉く精細明瞭に之れを論せさるものなし。**地方債論**は小野氏自ら著はせし所なり。今や我國に於て地方財政將に發達せんとするに當り、地方債の發行、政理、監督等は大に識者の注意を要する問題なり。又**附錄**として我國國債の沿革、公債に關する法令、各國公債に關する最近の統計表、財政學に關する參考書目錄等あり。有識の士希くは購讀の榮を給へ。

明治廿九年五月

東京京橋區彌左衛門町七番地
合名會社 **經濟雜誌社**

早稻田文學 第十號

◎論說傳紀
●水間沾德と立羽不角(岡野知十)●本多佐渡守(湖州生)●建部綾足(獨來)●審美的研究の一法(島村抱月)

◎脚本小說
●デンマルクの皇子ハムレットの悲劇(續き、坪内逍遙譯)●枯野の眞葛(水谷不倒生)

◎詩歌俳諧
●新評戲曲題詞(佐藤六石)●天然人間(正岡子規)●俳句(大野洒竹)●釋迦のわたし(岩野泡鳴)

◎雜俎
●昨日の讀書(不倒)●國樂の起原及發達(東儀季治)●養老謠曲の註(日下寛)●隨筆文學(星月夜)●我が演劇の將來(關根默庵)●夢貴の哲理(渭浴浪)

◎彙報
○文學界●自然論●談理の風●譯語●露伴非一葉對批評家●新進作家●再び批評の價値●美術と宗教○劇界●維新以來能樂の盛衰●各派の現況●前途の困難●能樂と芝居との關係○雜界●奢侈遊逸●婦人崇拜熱●博奕の流行●女性に對する注文●女子の職業●海外に於ける我醜業婦○教育界●教育と迷信●女子教育●小學校教員●活潑と悲慨悲壯○新聞雜誌文學細見

◎新刊十種

定價一部郵稅共十錢六部五十七錢每月二回發行

發行所 東京牛込大久保余丁町 **早稻田文學社**

廣告

何時にても看護婦派出の依賴に應じ申候

明治廿九年五月創立

東京麴町區富士見町二丁目二十二番地
富士見看護婦會
會主 吉村貞子

人生至大の問題●社會至要の研究

芬蘭大學社會學講師　ウエステルマルク氏著
日本法學士　藤井宇平先生譯

婚姻進化論

菊判紙數凡七百頁
五月十五日發行
正價二圓六十錢
郵税　十六錢

五月十五日以前御注文の諸君には一圓三十錢外に郵税十六錢を以て御送付致候

本書は婚姻に關する空前の大著述なり第一版は英國に於て出版せられ續いで**獨佛露伊瑞典**等諸國の語に飜譯せられたり我藤井先生は原著者の承諾を得尤信實に尤明晰に之を日本語に譯し本院に命じ之を發行せしむ本院の幸榮何ぞ之に加へん本書の如く夫の**愉快**にして**有益**なるもの世間幾何かある著者は古今萬國の婚姻現象を精査研究し之に對して自ら獨立の斷案を下せり**事實尤珍奇議論尤學理的**なり若し夫れ掲載科目の加きはなに其大要を擧げん

●總論●婚姻の起原●人類の交接に季節あること●亂淫の假説を評す●姦通と重刑●婚姻及獨身●宗教生活と獨身●男女の勸誘●戀着を買ふの手段●開化と婚姻と撰擇の自由●父新と婚姻●人類の雌雄淘汰●美と戀●美男及美女の觀念●標本的美人●同類相求むるの法●親屬相婚の禁●内婚する人民の滅亡する傾向●戀愛の複雜なる性質●子を欲する情より動されたる男女の撰擇●掠奪婚及賣買婚●婚姻と教育●婚姻の儀式●人類婚姻の制●一夫一妻●多妻多夫●男兒或は女兒の生るゝ原因●一夫一妻は將來社會の認る惟一の婚姻なるや●離婚は法律の制限すべき者なるや●結論

(注意)

婚姻進化論諸言 本書は婚姻進化論が如何なる事項を論じ如何なる体裁なるやを示さんが爲めに特に印刷したるものなり以て婚姻進化論の見本と爲すに足る郵券六錢御送附あれば直ちに發送すべし

發行所　東京本郷六丁目五番地　哲學書院

福音叢誌創刊廣告

本誌は基督教の活動力を進め聖書上の智識を普及せんが爲に發刊するものなり
本誌の希望は米英兩國及獨逸國の重なる宗教雜誌に登載せらるゝ諸大家の論文中より英を拔き萃を摘みて之を日本の讀者に紹介するに在り飜譯平易明晰を旨とす
本誌は高名なる碩學又は牧師に依賴して特別寄書を請ひ以て誌面の光彩を添へん事を期すベルリン大學の教授ベルナードヷイス氏は既に其承諾を得たり此外依賴中の大家數名あり
本誌は古今有名なる宗教家學者牧師等の肖像を掲け其他基督教の歷史に關係ある圖書を載せて看客の參考に供へんと欲す
本誌は每月十日發行と定む即ち第一號を六月十日に發刊すべし列號に登るべき重なる論文左の如し

ルーテル小傳	ホイトン
ルーテル論	ハアナツク教授
ハアナツク教授	ボルドウイン教授
パウロ神學の原素	アルブレクト教授
基督の家族の說	アシユー教授
英國三の偉人の家庭	ゼストーリル
生活上の[illegible]選さ人の品性	アイマンマクラレン

初號にはルーテルの肖像及史上に著名なるワートベルヒ城ウォームス會等の精美なる圖あり本誌の注文及其他の庶務はすべて京橋區出雲町警醒社書店宛にて申込あらん事を乞ふ但し編輯事務は東京牛込區市ケ谷仲之町廿二番地福音叢誌社宛にて御通信あれ

本誌定價（郵税共）

一部	七錢
半年分	三十八錢
一年分	七十錢

發行所　東京々橋區出雲町一番地　警醒社書店

廣告

基督教の教理につき御質問なされ度御婦人方は左の場所へ宛て日本文の書面を以て御質問被下候はゞ直ちに適當なる書物を差上け候か又は私方より日本文の書面を以て説明致すべく候依て此段廣告候也

東京市牛込區矢來町三番地
ミス、バラード

女學雜誌定價表

前金	壹冊定價　金拾錢 一年前金　金壹圓(無郵稅)
廣告料	一行　一回(廿七字詰)　前金十錢 同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

明治廿七年一月十四日內務省許可
明治廿九年五月廿四日印刷
明治廿九年五月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場(電話十九番)

明治廿五年三月十五日遞信省認可

明治廿五年三月十五日遞信省認可

